愛知県: 準絶滅危惧 (国:準絶滅危惧) AICHI: NT (JAPAN: NT)

モートンイトトンボ Mortonagrion selenion (Ris)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は50%、 現存数は15であり、準絶滅危惧 に相当する。

かつては平野部から山間部に かけての広範囲で見られたが、 現在は山間部に局限されるよう になったので、今回新たに追加 された。

【形 熊】

――小型のイトトンボで、♂は黄 緑色の体色で黒斑がある。♀は 未熟な間は鮮やかなオレンジ色 であるが、成熟すると緑色に変 わり、腹部背面に黒条が現れる。



【分布の概要】

【県内の分布】

尾張~三河の平地から山地にかけての 30 市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

北海道南部から九州南部にかけて記録され ている。

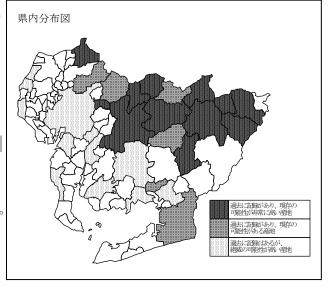
【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシアに分布する。

【生息地の環境/生態的特性】

成熟成虫は、湿原や休耕田など低い植生の ある浅くて開放的な水域で見られる。未熟成 虫は、水域からほとんど移動しないようで、 成熟成虫と入り混じって見られることが多い。 幼虫は、成虫の見られる水域で植物などにつ かまっているのが観察される。

成虫は6月頃から羽化し、成熟成虫は7月 頃まで見られる。年1化である。



【現在の生息状況/減少の要因】

かつては尾張から三河にかけての平野部にも広く分布していたが、それらはほぼ消滅し、確実に 現存するのは山間部を中心とした地域だけになった。

本種の好む浅くて開放的な湿地は、特に人口密度の高い平野部周辺では埋め立てられることが多 い上、近年発生することの多い旱魃などの影響によっても絶滅していると考えられる。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息地である湿原や休耕田の保存
- 2) 成虫の活動の場となる生息地周辺の草地の維持

【特記事項】

和名はイギリスのトンボ研究者ケネス・モートン氏に由来する。

キイロサナエ Asiagomphus pryeri (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は38%、 現存数は13であり、準絶滅危惧 に相当する。

かつては丘陵地を中心とする 地域の緩やかな流れに広く分布 していたが、分布域・個体数と も減少傾向が大きいため、今回 新たに追加された。

【形態】

黒地に黄斑のある大型のサナエトンボである。ヤマサナエに似ているが、♂は尾部の下付属器が上付属器より長いこと、また♀は生殖弁が下方に突出していることで識別できる。

和名は同属のヤマサナエより も黄色の強いサナエトンボとい う特徴に由来する。



♂. 瀬戸市海上町, 1999年6月11日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張~三河の丘陵地から低山地を中心に 21 市町村(旧市町村単位)で記録されている。 【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて分布し、 種子島でも記録されている。

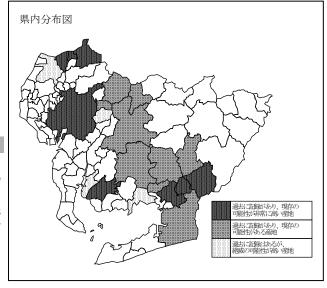
【世界の分布】

日本特産種である。

【生息地の環境/生態的特性】

成熟成虫は、流れの緩やかな河川中流域や、 それに接続する用水路などで見られる。未熟 成虫は、発生地付近の樹上で生活しているよ うで、見かけることは少ない。幼虫は、砂泥 質の河床でもやや泥の多い部位に潜り込んで いることが多い。

成虫は5月頃から羽化し、成熟成虫は7月頃まで生殖行動を行なう。幼虫は通常足かけ3年で成虫になるようである。



【現在の生息状況/減少の要因】

かつては平野部に近い庄内川水系でも記録されているが、現在は個体数が大きく減少し、名古屋 市や長久手町で稀に見られるに過ぎない。西三河でも矢作川支流の乙川水系に生息していたが、個 体数を減らしている。また東三河でも豊川市周辺の丘陵地の小河川や用水路に見られたが、やはり 個体数は明らかに減少傾向にある。なお近年、江南市などの木曽川本流に少数ながら生息するのが 確認されている。

本種は岸辺に砂地がむき出しになった緩やかな流れの小河川や用水路を好む傾向にあるが、河川 改修により流れが直線化され、砂地が消失すると減少に向かう例が多い。そのような改修は幼虫の 好むやや泥の多い砂泥底も消失することが多いので、本種にはダメージが大きいようである。

【保全上の留意点】

- 1) 成虫の産卵域となる岸辺の砂地の確保
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保
- 3) 河川の水質汚濁の防止

愛知県: 準絶滅危惧 (国: 準絶滅危惧) AICHI: NT (JAPAN: NT)

メガネサナエ Stylurus oculatus (Asahina)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は46%、 現存数は 6.5 であり、絶滅危惧 Ⅱ類に相当する(現存数の端数 は資料編:評価方法の詳細を参 照)。

ただし本種は土着ではなく 移入の可能性があることを考慮 し、準絶滅危惧として扱う。

【形 態】

腹部第7から9節が著しく広 がった大型のサナエトンボであ

和名は顔面の黄色斑をメガネ に見立てたことに由来する。



♂. 長久手町原邸, 1974年8月19日, 鵜殿清文 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張平野を中心に分布し、名古屋市内の天 白川や矢田川、長久手町の香流川など 11 市町 村(旧市町村単位)で記録されている。矢作 川水系や愛知用水でも確認されている.

【国内の分布】

本州東北部から中部にかけて記録されてい

【世界の分布】

日本特産種である。

【生息地の環境/生態的特性】

成熟成虫は、発生地である河川等とその周 辺で見られる。未熟成虫は、かなり移動する ことがある。幼虫は、河川中流域でも見られ るが、波砕湖である琵琶湖のような湖にも生 息し、いずれの場所でも深い部位を好む。

成虫は 7~8 月を中心に比較的長期間にわ たって羽化し、成熟成虫は 8~9 月を中心に 見られる。幼虫期間はナゴヤサナエと同様、 複数年かかるものと思われる

県内分布図 味に記録はあるが、 触の可能性が高い産地

【現在の生息状況/減少の要因】

名古屋市内周辺はかつては多産したが、現在では絶滅したと考えられる。愛知用水の中継箇所で ある愛知池では幼虫・羽化殻が確認でき、また豊田市の矢作川水系でも稀に成虫が確認される。

名古屋市内等での絶滅は、河川の汚濁や改修が要因の一つと考えられるが、後述する幼虫の移入 が無くなったことも要因である可能性がある。

【保全上の留意点】

- 1) 河川の水質汚濁の防止
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保

【特記事項】

かつての多産地、天白川や矢田川等では30年ほど前に個体数を減らし、絶滅した。この事実につ いて、かつては本種幼虫が琵琶湖産稚アユの放流に混じって移入されていたが、その後稚アユ放流 量の減少と、稚アユとそれ以外の生物(本種幼虫)の分別精度向上によって幼虫が移入されなくな って絶滅したのではないか、と考える意見がある。

また本種が土着種ならば、相対的に環境破壊を受けにくい水深数 m に幼虫が生息できる利点を享 受して、もっと多くが現存してもおかしくないが、現在は人工的要素の高い水域でしか見られない という事実も、本種の土着性に対して疑問を投げかける。

愛知県:準絶滅危惧 (国:準絶滅危惧)AICHI: NT (JAPAN: NT)

ナゴヤサナエ Stylurus nagoyanus (Asahina)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は44%、現存数は13.5であり、準絶滅危惧に相当する(現存数の端数は資料編:評価方法の詳細を参照)。



♂. 一宮市北方町北方,2007年9月28日,安藤 尚 撮影

県内分布図

【形 態】

腹部第7から9節が著しく広がった、やや大型のサナエトンボである。メガネサナエより一回り小さく、腹部第4~7節の黄色斑が環状斑となっていることで識別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張平野を中心に分布し、天白川や木曽川、 愛知用水が流れる 24 市町村 (旧市町村単位) で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

日本特産種である。

【生息地の環境/生態的特性】

成熟成虫は、主に大きな河川の下流域で 8 ~9 月を中心に見られる。未熟成虫は、発生地からかなり移動することもあり、木曽三川で発生したと思われる個体が名古屋市街や滋賀県の伊吹山で採集された例がある。幼虫は、河川下流域の砂泥底に生息する。羽化は 7~8 月を中心に見られ、成虫になるまでに複数年かかると推測される。

【現在の生息状況/減少の要因】

木曽川及び愛知用水の流路では幼虫の生息

が確認されている。また近年、矢作川水系でも少数ながら本種の生息が確認された。かつては天白川に多産したが、現在では絶滅したと考えられる。天白川は木曽川に比べて河川の規模が小さく、市街地化が一気に進展したため、川の汚染と改修等が相まって絶滅した可能性が大きい。なお本種幼虫はトンボとしては深い(水深 1m 以上)部位にも生息できるため、比較的環境変化の影響を受けにくいが、堰等の建設による水の滞留で生存を脅かされる可能性はある。

なお木曽川下流域では、羽化中の本種に水上バイクの起こした波がかぶり、羽化不全となるのが 観察されている。

【保全上の留意点】

- 1) 河川の水質汚濁の防止
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保
- 3) 幼虫の羽化場所付近での水上バイクやプレジャーボート等の使用自粛

【特記事項】

名古屋市を基産地とする種で和名と種名が「名古屋」に因んで命名された唯一のトンボである。本種の幼虫は汽水への耐性を有しているらしく、他県では河川の河口域で採集された例がある。

トラフトンボ Epitheca marginata (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は55%、 現存数は14であり、準絶滅危惧 に相当する。

前回のレッドリストでは絶滅 危惧Ⅱ類としたが、尾張から三 河にかけての丘陵地で複数の新 産地が見つかったので、今回は 準絶滅危惧に選定された。

【形 態】

体色は黒地に橙褐色の斑紋を 持つ中型のトンボである。♂の 翅はほぼ透明であるが、♀では 前縁に黒褐色の帯が発現するこ とが多い。

和名は体色の斑紋を虎斑に見 立てたことに由来する。



AICHI: NT

♀. 名古屋市千種区田代町, 1952 年 4 月 28 日, 高崎保郎 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張~三河の平野部から丘陵地にかけての 31 市町村(旧市町村単位)で記録されている。 【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて分布し、 壱岐等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境/生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけ てのヒシ、ジュンサイなど浮葉植物の豊富な 池沼で見られる。未熟成虫は、発生地付近の 林縁などで摂食飛翔しているのが見られる。 幼虫は、浮葉植物や抽水植物につかまってい ることが多い。

成虫は4月後半から羽化し、成熟成虫は5 月を中心に見られるが、成虫の出現期間は長 くない。1年1化である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつては街中で見られることもあったが、 現在では自然環境が良好に保全された、限られた池沼でしか見ることができない。尾張で多産した 平野部の生息地の大半は失われ、一宮市(旧尾西市)などのごく一部で残っているに過ぎない。た だし、長久手町や瀬戸市などの丘陵地には若干の産地が残されており、また知多半島の常滑市など にも現存している。西三河では豊田市周辺に現存するが、岡崎平野周辺の産地は失われたようであ る。東三河では豊橋市に現存するが、それ以外の産地はほぼ絶滅状態にあると思われる。

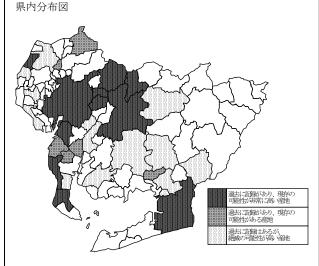
池沼の埋め立て、護岸による植生の消失、水質悪化が本種減少の大きな要因であるが、外来魚の 放流による直接・間接的な影響もそれに拍車をかけている可能性が高い。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域となる岸辺の浮葉・抽水植物の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の林地の確保
- 3) 幼虫/成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

本種の卵はトンボ類の中でも極めて特異である。一般的にトンボ類の卵は水中で 1 個ずつばらば らになるが、本種は卵塊で産み落とし、まるでヒキガエルの卵の様にそれが水中で 20cm 以上のゼラ チン状の卵紐となる。一つの卵紐には600個以上の卵が含まれるという。



愛知県: 準絶滅危惧 (国: 準絶滅危惧) AICHI: NT (JAPAN: NT)

キイロヤマトンボ Macromia daimoji Okumura

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は31%、 現存数は 11 であり、準絶滅危惧 に相当する。

尾張に確実な産地は存在しな いが、三河の矢作・豊川水系中 流域に現存する。

【形 態】

体色は黒地に鮮やかな黄色斑 を持つ細身のトンボである。成 熟した♀の翅は黄褐色にけぶる ことが多い。

和名は黄色いヤマトンボとい う意味である。



【分布の概要】

【県内の分布】

尾張~三河の丘陵地を中心とした 16 市町 村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録され ている。

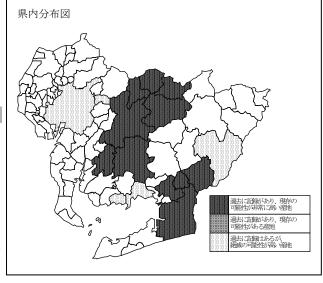
【世界の分布】

朝鮮半島に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに丘陵地を流れる砂泥底 のある河川中流域で見られる。未熟成虫は、 発生地周辺をあまり離れないようで、付近の 林縁などで摂食飛翔しているのを観察してい る。幼虫は、流れの緩やかな砂泥底に浅く潜 り込んでいることが多い。細かく見れば、小 さな淵に落ち込む手前で表面に薄く泥をかぶ る程度の流速となる部位を好む。

成虫は5月後半より羽化し、成熟成虫は6 ~9 月上旬頃に見られる。幼虫期間は野外で の幼虫の成長の様子から見ると、2 年と推測 される。



【現在の生息状況/減少の要因】

尾張には確実な産地は存在しない。西三河では安城市から豊田市(旧旭町)にかけての矢作川水 系に現存するが、同水系には本種が好む砂泥底が多いので、本種は広範囲に分布する。東三河では 豊川市から新城市にかけての豊川水系に現存する。

河川の水質汚濁と底質の改変は、本種絶滅の最大の要因である。本種の基産地である名古屋市内 の河川でも水質悪化とともに絶滅したと推測される。矢作川水系でも岡崎市の青木川では上流域で 造成が行われ、雑排水が流入するようになった結果、本種は姿を消した。

【保全上の留意点】

- 1) 河川の水質汚濁の防止
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保
- 3) 成虫の休息域となる水域周辺の林地の確保

【特記事項】

本種は名古屋で採集された個体を基に記載された。

愛知県: 準絶滅危惧 (国:リスト外) (JAPAN : -)

AICHI: NT Amantis nawai (Shiraki)

【選定理由】

本種は、主に安定した常緑広葉樹林に生息するが、小型かつ微翅のため移動能力は小さい。生息 地の小さな環境変化にも敏感に反応しやすく、生息地の分断により当該個体群が孤立し除々に消滅 する危険性が高い。

ヒナカマキリ

【形態】

日本産カマキリ目のうちでは最も小さな種類。体長は \oslash 12 \sim 15mm、 \circlearrowleft 13 \sim 18mm。 \oslash \circ \circ \circ とも に翅は小さく鱗片状。体は褐色で全体に暗褐色斑点があり、個体によっては全身が黒く見えるほど に発達する。胸・腹部背面の正中線に沿っては暗色条となる。前脚は特に太く頑丈で獲物を捕える ための捕獲脚となっている。

一般にカマキリ目の種類は同一種内で「緑色型」と「褐色型」の両方が見られるが、本種では「緑 色型」の記録は無い。

【分布の概要】

【県内の分布】

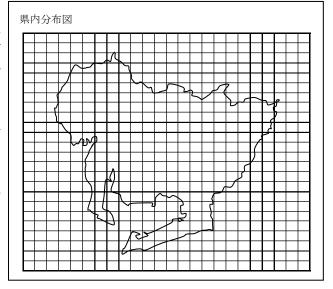
南方系の種類であり、渥美半島・知多半島 地域から知られているが、内陸部では豊田市 猿投山山麓からも記録されている (岡田, 1987; 田中, 1986)。

【国内の分布】

本州以南、琉球列島沿いにその最西端の与 那国島まで分布する。

【世界の分布】

台湾。ここでは長翅型個体も記録されてい る。



【生息地の環境/生態的特性】

主として常緑広葉樹林の林床もしくは林床の低木上やシダ植物上などで活動。沿岸地のタケ・サ サ林内や松林内などでも見られる。木漏れ日が射すような林内で、風通しの良い割に林床に湿気の あるような環境を好む。

本種の餌の捕獲形式は「待伏型」だけでなく、獲物を積極的に追いかける「追尾型」も普通に見 られる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

本種は、一般的な蒐集の対象とはなっておらず、採集による減少は認められない。地域整備など 開発のため生息地が減少・分断され環境状況は悪化しつつある。

【保全上の留意点】

本種は、小型でありかつ飛ぶことができず移動能力に乏しい。したがって「小さな開発」であっ ても大きな悪影響を受ける可能性が高い。生息記録地点のみならず、それに隣接する環境も一体と して保全する必要がある。

また、知多半島と渥美半島の既知生息地は畑地に隣接しており、農薬などの流入にも注意が必要 である。

【引用文献】

岡田正哉, 1987. ヒナカマキリの愛知県内での分布. 佳香蝶, (150): 27. 田中 番,1986. 豊田市におけるヒナカマキリ2種の記録. 佳香蝶,38 (147):46.

【関連文献】

岡田正哉, 2001. ヒナカマキリ. 昆虫ハンター カマキリのすべて: 46-47. トンボ出版, 大阪市. 山崎柄根, 1981. 日本産ヒナカマキリについて. Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo, (14): 95-102.

愛知県:準絶滅危惧 (国:リスト外)

(JAPAN : -)

AICHI: NT

クチキコオロギ Duolandrevus ivani (Gorochov)

【選定理由】

本種は、♂・♀とも短翅で飛ぶことはできず移動能力に乏しいこと、一生に 2 年以上を要することなど安定した環境が必要である。しかし、本種の主たる生息地である常緑広葉樹林は伐採や土地造成のため減少しつつある。

また、自然的要因とも思われるが、沿岸部での一部の生息樹林の乾燥化が厳しさを増しているようで本種の生息に圧力がかかっているようである。

【形 態】

体長は♂・♀とも 25~31mm。体は艶のある暗茶褐色。体に比較して頭は大きいが翅は短く「オオズコバネコオロギ」という異名もある。触角は長く体長の数倍はある。後脚腿節は太くその外側は淡茶褐色。内側は淡色で末端部は暗茶褐色となる。日中は樹皮下や石下などにひそむため体は扁平。

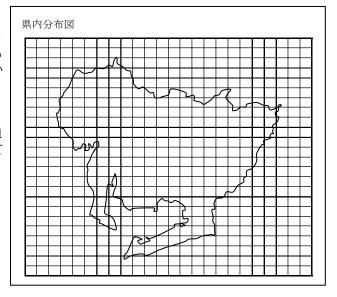
【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島、知多半島周辺に分布。静岡県との県境山地沿いに北上している可能性があるが確認はされていない。篠島には生息している(岡田, 1991)。

【国内の分布】

本州、四国、九州。他に、小笠原諸島に 1 種、南西諸島に 2~3 種の近似種が知られている(市川・村井・本田, 2000)。



【生息地の環境/生態的特性】

主に常緑広葉樹林を好むが、杉林の中にもいる。林床にはある程度の湿気が必要で乾燥しすぎると生息できなくなる。なお、田原市(旧田原町)の生息地は畑地を通る用水路である。これは深さ1~2メートルで壁面には草や小低木が生えている環境である。

夜行性で、日中は樹皮下や石下や崖の割れ目などにひそむ。幼虫、成虫ともに越冬する。

【現在の生息状況/減少の要因】

各生息地の樹林は多かれ少なかれ乾燥気味で環境は悪化しつつある。特に、篠島でその現象が明瞭。気象原因と思われるが、直接的には樹林内の多数の松が枯死し、風通しが良くなった分乾燥が進んだものと思われる。このため篠島での個体数は減少している。

【保全上の留意点】

現在の生息地の樹林とともに林床の草・低木などもある程度残し、本種の活動・生息に必要な湿気が保たれるようにすること。下草刈りや枝打ちなどでの過度の整備は林床を乾燥させ、本種を駆逐することにもなるので注意が必要である。

【引用文献】

市川顕彦・村井貴史・本田恵里, 2000. 総説・日本のコオロギ. ホシザキグリーン財団研究報告, 4: 257-332. 岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫, (下): 5-20. 愛知県.

【関連文献】

大野正男, 1976. 分布総説(2) クチキコオロギ(1). 昆虫と自然, 11 (12): 7-11. 大野正男, 1977. 分布総説(3) クチキコオロギ(2). 昆虫と自然, 12 (2): 16-20.

アカジマアシブトウンカ Ommatidiotus japonicus Y.Hori

【選定理由】

名古屋市守山区を模式産地として記載され た種で、きわめて限られた環境にしか生息が 確認されていない。しかも、生息が確認され ている地点はそのほとんどが 1ha 未満の湿地 で名古屋市内や近郊にあるため、今後造成な どのために消滅する危険性が極めて高い。

【形 態】

体長は翅端まで 4.2~5.0mm。頭部は前方 に突出し、幅の約1.4倍の長さがある。頭頂 部から小楯板の先端まで赤色の条線が走る。 翅は半透明で、雄では前縁に黒色の縁取りと 6 条の橙色の条線があるが、雌ではこれらを 欠く。現在知られているのは短翅型のみで、 後翅は痕跡的である。

【分布の概要】

現在までに確認されているのは県内では名 古屋市守山区内の2箇所、豊田市浄水、新城 市内の各1箇所だけで、県外では静岡県内1 箇所と岐阜県内に2箇所(いずれも未発表) だけである

【生息地の環境/生態的特性】

生息地はいずれもいわゆる低層湿地と言わ れる湿地で、シラタマホシクサなどを含んだ 植生と密接に関連している。寄主植物は不明 であるが、ヨーロッパなどに産する近縁種の 食草から推定するとカヤツリグサ科植物であ ろうと思われる。成虫は6月末頃から9月ま で見られる。9 月に終齢幼虫を採集している が越冬熊はおそらく成虫と考えられる。

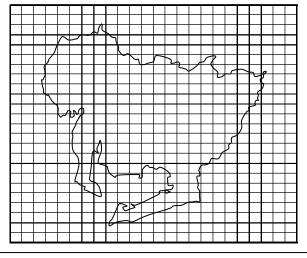
【現在の生息状況/減少の要因】

これまでに4箇所から記録されており、そ の後の追加産地は見られない。模式産地であ る名古屋市守山区大森の湿地は、金城大学の 教育園となって一応保全されているが、周辺 で行われた工事等の影響で乾燥化が進み 1999年の調査時には採集できなかった。東谷 の生息地は砂防指定地内にあり毎年確認でき ている。豊田市浄水地内は病院移転などで大 規模な土地改変が行われており、近年確認で きていない。新城市の湿地は調査不足で生息 状況は不明である。



名古屋市守山区大森. 1975年6月21日. 堀 義宏 採集





低湿地に分布するため、湿地の埋め立てや周辺工事の影響で水源が断たれたことによる乾燥化な どで減少したものと考えられる。

【保全上の留意点】

人里近くに分布するため、宅地造成などの開発行為に対しては難しい面があるが、シラタマホシ クサが生育するような低湿地の保全が重要であり、周辺地域も含めた水源の確保にも留意する必要 がある。頸吻亜目の種群は小型種が多く識別も難しいため、一般にほとんど採集されない面もある ので、より詳細な分布調査が必要である。

【関連文献】

Hori Y., 1977. A New Species of the Genus Ommatidiotus (Homoptera Issidae) from Japan. Annot. Zool. Jap., 50 (2): 127-130.

- 堀 義宏, 1982. 愛知県の半翅目. 昆虫と自然, 17 (12): 22-25.
- 堀 義宏・浅岡孝知・原田猪津夫, 1990. 愛知県の頚吻亜目. 愛知県の昆虫, (上): 105-122. 愛知県.

ヒメタイコウチ Nepa hoffmanni Esaki

【選定理由】

モウセンゴケやシラタマホシクサなどが生育する湿地に生息し、本県では広く分布するものの、 宅地造成による埋め立てなどで生息地が年々減少している。

【形 態】

体長は 18~22mm。体型は長卵形で光沢のない暗褐色を呈し、尾端の呼吸管は非常に短い。前脚は捕獲脚になっている。前胸背は幅広く、小楯板は正三角形を呈す。

【分布の概要】

【県内の分布】

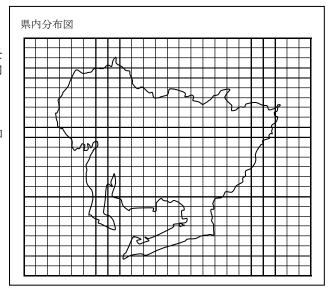
豊橋市、豊田市、岡崎市、幸田町、吉良町、 幡豆町、西尾市、知多市、美浜町、瀬戸市、長 久手町、春日井市、名古屋市、犬山市など県内 各地で確認されている。

【国内の分布】

本州(静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、和歌山県、兵庫県)、四国(香川県)。

【世界の分布】

ロシア極東(沿海州)、中国、北朝鮮、韓国。



【生息地の環境/生態的特性】

湿地、水田や用水路、溜め池の水辺などで常に水の流入が認められる環境に生息する。小石や植物の堆積物の下などに潜み、クモ類やゴミムシ類など徘徊性の小動物を捕食する。飛翔しないため移動性が乏しい。

【現在の生息状況/減少の要因】

道路脇や河川敷などの小規模な湿地でも確認されることがあり、湿地環境があれば多くの場合生息している。溜め池の水辺でも見つかることがある。道路建設、宅地造成による生息地の埋め立てやこのような工事によって水脈が分断されたことによる乾燥化などで減少している。

【保全上の留意点】

人里近くに生息する場合は、宅地造成などで難しい面もある。沢水など常に水の流入が認められる環境に依存するため、水源を確保するうえで後背地の森林を保全することが重要である。

【特記事項】

西尾市の生息地が愛知県指定の天然記念物に指定されている(昭和43年指定)。

【関連文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.

長谷川道明・佐藤正孝・浅香智也, 2005. ヒメタイコウチの分布, 付関連文献目録. 豊橋市博研報, (15): 15-27.

堀 義宏·佐藤正孝, 1984. 半翅類. 愛知の動物: 99-107. 愛知県郷土資料刊行会.

河路掛吾, 1990. ヒメタイコウチ. 愛知県の昆虫, (上): 503-506. 愛知県.

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

(国:リスト外)

AICHI: NT (JAPAN: -)

愛知県: 準絶滅危惧

ナベブタムシ Aphelocheirus vittatus Matsumura

【選定理由】

主として河川上流域およびその支流となる小河川の清流に生息しているが、砂地のある清流の減少に伴いその生息が危惧されている。護岸工事や水質等の悪化により減少している。

【形態】

体長は 8.5~10mm、体型はほぼ円形・扁平である。体色はやや変化が見られるが、一般に頭部は 黄褐色、胸部・腹部背面は暗褐色の地色に黄褐色斑がある。前胸背の側角は円みを帯び、尖らない。 通常は短翅型で、稀に長翅型が出現する。

【分布の概要】

【県内の分布】

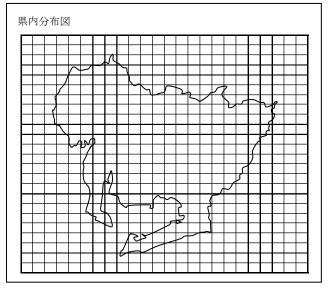
設楽町、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市などの河川で確認されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国。



【生息地の環境/生態的特性】

低山間地の清流に生息し、底質が細かい砂礫の早瀬でよく確認される。プラストロン呼吸により、終生水中で生活することができる。

【現在の生息状況/減少の要因】

陸上昆虫類の調査要領では確認しにくいため報告例は少ないが、実際にはより多くの産地があると考えられる。また、生息地での個体数は比較的多い。水質を含めた水環境に大きく依存する種であるので、護岸工事や後背地の森林の荒廃が減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

護岸工事など河川改修に当たっては、土砂の改変に留意し、濁水の発生を抑え、水の流れが完全に遮断されることがないよう気をつける必要がある。主として早瀬に依存しているので、直線的で単調な流れの河川形態にすることは避ける必要がある。

【関連文献】

浅岡孝知, 2001. 旭町のカメムシ目. 旭町の昆虫: 65-84. 旭町.

浅岡孝知·家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

愛知県: 準絶滅危惧 (国:リスト外) AICHI: NT

(JAPAN : -)

オオアメンボ Aquarius elongatus (Uhler)

【選定理由】

かつては平野部から山間部にかけて普遍的に分布していたが、近年、平野部での生息が確認され ていない。これまで記録のあったところでも確認できていないことから危惧されている。

【形態】

本州産アメンボ科では最大級で、体長は 19~27mm、体肢は黒色で長い。♂の中脚は特に長く、 腿節は体長よりも長い。一般に♂の方が♀よりも大型である。

【分布の概要】

【県内の分布】

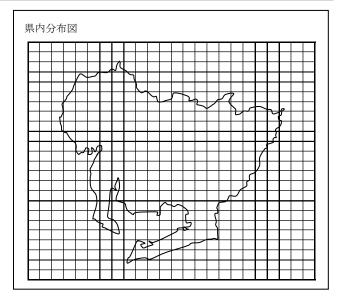
豊根村、新城市、豊田市、岡崎市、瀬戸市、 犬山市などで確認されている。

【国内の分布】

本州、隠岐、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、韓国、台湾。



【生息地の環境/生態的特性】

丘陵地から山間部にかけて、周辺を樹林に囲まれた池沼などに生息する。砂防堰堤によってせき止め られた湛水域でもよく見られる。樹木の葉などによって日陰となった場所を好む。

【現在の生息状況/減少の要因】

丘陵地から山間部にかけて広く分布しており、水深の深い止水域に生息している場合が多い。河 川上流域の緩流部でも見つかる。人里の分布域では水質の悪化により減少したと思われる。

【保全上の留意点】

溜め池の改修に当たっては、周囲をすべてコンクリート護岸で覆うことは避け、周辺の樹木をで きるだけ伐採しないよう留意する。河川の改修では、三面コンクリート張りの直線的な流れにする ことは避け、瀬、淵が連続的に存在するような自然な形を残すことが望まれる。

【関連文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県. 矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200. 吉富博之・長谷川道明, 1997. 愛知県のアメンボ. 豊橋市博研報, (7): 35-39.

愛知県:準絶滅危惧

(国:準絶滅危惧)

$AICHI:NT \qquad \qquad (JAPAN:NT)$

エサキアメンボ Limnoporus esakii (Miyamoto)

【選定理由】

全国的に産地は局所的で、県内でも約10箇所から確認されているにすぎない。生息基盤が脆弱である。

【形 態】

体長は 8~10mm。体色は暗赤褐色~褐色で、体側に銀白色の毛による縦帯をもつ細身の種である。 触角は第4節が最も長い。

【分布の概要】

【県内の分布】

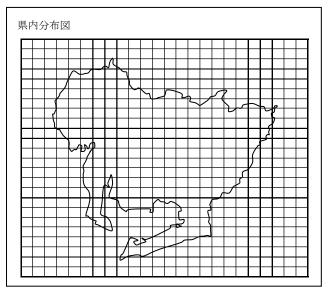
新城市、豊橋市、田原市、安城市、春日井市、一宮市、東浦町、常滑市などで確認されており、沿岸部に分布の中心がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、韓国。



【生息地の環境/生態的特性】

平地から丘陵地にかけて、ヨシやガマなど抽水植物が繁茂する溜め池やワンドなどに生息する。 生活排水の流入などがない水質の良好な環境で確認される。通常開けた水面上には見られず、密集 した抽水植物帯の中で生活するため、発見するのは容易でない。

【現在の生息状況/減少の要因】

渥美半島から知多半島にかけて沿岸部付近の溜め池や木曽川など大河川のワンドに生息している (矢崎・石田, 2008)。溜め池の埋め立てや宅地造成、河川の護岸改修等により生息地となるヨシ原が 繁るような低湿地が減少したことが考えられる。

【保全上の留意点】

水質悪化や抽水植物群落の消失などに留意し、水源の確保を考慮した周辺地域の保全を検討する必要がある。ワンドに生息する場合は、生息地の改変が極力起こらないよう、安易な護岸整備を避ける必要がある。

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

【関連文献】

安城市史編集委員会, 2005. カメムシ目. 新編安城市史 11. 資料編自然 別冊 安城市動物目録: 91-99. 安城市. 矢崎充彦, 2001. エサキアメンボ愛知県に産すー東海地方のアメンボ科分布資料-. 佳香蝶, 53 (207): 39-41.

カワラゴミムシ Omophron aegualis Morawitz

【選定理由】

よごれのない河川の砂地に生息する種で、かつては名古屋市内にも生息していたが、河川敷の改変と汚れによって生息地が減少し、県内での種の存続への圧迫が強まっている。

【形 能】

体長 5.5~6.5mm。体型は円形で、鮮やかなオレンジ色。頭部は広く緑色を帯びた金属色。前胸中央部に長円形の、上翅にはやや複雑な 3 条の帯条の緑色を帯びた金属色の紋があるが、上翅の紋には変異が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

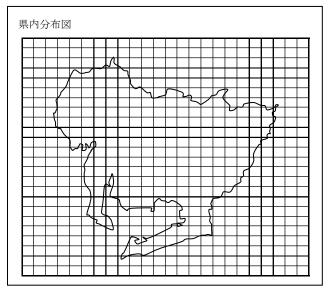
弥富市、名古屋市、豊田市などから記録が ある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、沿海州、中国。



【生息地の環境/生態的特性】

河川や湖などの砂地に生息する。日中は砂中に深く潜っていることが多く、夜間に砂地上や、水辺などを徘徊する。また灯火にもよく飛来する。

【現在の生息状況/減少の要因】

弥富市鍋田干拓ならびに豊田市(旧足助町)の矢作川河川敷では1980年代後半に生息が確認され、その後も生息地の環境に大きな変化がないため、現在も生息していると考えられる。名古屋市では1950年代まで庄内川、矢田川から生息が確認されていたが、現在の河川敷の環境から判断して生存確認は絶望的。本種の減少の要因としては、河川改修あるいは汚染などによって生息地である砂地が消失したことが大きいと推定される。

【保全上の留意点】

生息地である河川等の砂地の確保が最低限必要である。河川の改修工事による大規模な砂地の改変は本種の存続に深刻な影響を与える可能性が高い。また、河川敷への四輪駆動車などの乗り入れは、生息地に多大な悪影響をもたらすため、慎むべきである。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫、愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県、 穂積俊文, 1990. 愛知県弥富町でカワラゴミムシ. 佳香蝶, 42 (161): 15. 吉富博之, 1994. 愛知県産甲虫類分布資料(1). 佳香蝶, 46 (178): 21-22.

キバネキバナガミズギワゴミムシ Armatocillenus aestuarii S.Uéno et Habu

【選定理由】

生息地である河川河口部の自然海岸の消失、汚染により、生息基盤が脅かされている。

【形態】

体長 4.5mm 内外。頭部、前胸は黒色で、緑色の金属光沢が強い。上翅は、広く黄色。よく似た種にキバナガミズギワゴミムシがあるが、上翅が広く黄色となることと、後脚転節が長く、腿節の 2/3 近くまで達することで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

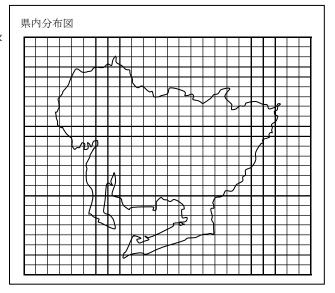
豊橋市、西尾市、愛西市、弥富市から記録がある。

【国内の分布】

千葉県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本の特産種である。



【生息地の環境/生態的特性】

河口部の砂地に生息する。海棲の種で、満潮時は、完全に水没した砂中などに潜み、干潮時に露出した干潮帯で活動する。近縁のキバナガミズギワゴミムシが混生する河川では、より河口部に偏って多く見られる傾向がある。

【現在の生息状況/減少の要因】

豊橋市の豊川、梅田川、西尾市の矢作川、弥富市(旧弥富町)の鍋田川、愛西市(旧立田村)の木曽川から確認された。生息地での個体数は決して少なくないが、生息範囲はいずれも広くなく、また限られている。減少の要因としては、生息域である河川河口部の汚れ、堤防構築などによる生息場所の消失。河口部の堰などによる生息域の塩分濃度の変化などが考えられる。

【保全上の留意点】

県内で現在生息している地域は、まだ決して少なくないので、現在の環境を維持するとともに、 上流部も含めた河川の浄化、河口付近の環境回復に努力すれば、存続は可能と思われる。しかし、 生息地が特殊な環境であることから、河口堰などの建設、潮間帯の汚染などによる影響に敏感であ り、急速に衰退に向かう可能性も少なくない。

【関連文献】

森田誠司・白井勝己・蟹江 昇・長谷川道明, 1996. 愛知県におけるキバナガミズギワゴミムシ類の採集記録. 豊橋市自然史博研報, (6): 27-30.

愛知県:準絶滅危惧 (国:絶滅危惧Ⅱ類)

AICHI: NT (JAPAN: VU)

ジャアナヒラタゴミムシ Jujiroa ana (S.Uéno)

【選定理由】

豊橋市の蛇穴を基準産地として記載された種で、東海地方の固有種であるが、近年生息の確認例が減少している。マニアによる過剰採集やトラップの放置なども脅威となっていることからランクを引き上げる必要があるかもしれない。

【形態】

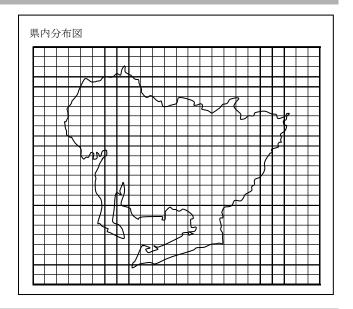
体長 12.5mm 内外。体色はアメ色で、複眼は退化傾向にあり、小さい。体型はやや細型で両側はほぼ平行。各脚はやや短くがっしりしている。

【分布の概要】

【県内の分布】 豊橋市 (蛇穴)。

【国内の分布】 東三河ならびに静岡県西部。

【世界の分布】 日本の特産種である。



【生息地の環境/生態的特性】

洞窟あるいは、地中性。洞窟内部の石下などから発見される他、洞窟周辺の林床に設置されたベイトトラップで採集される。主要な生息地は地下浅層であると推定される。

【現在の生息状況/減少の要因】

基準産地の蛇穴ではこの 10 年ほど生息確認が途絶えている。隣接する新穴にも生息していると思われるが、現在入り口が閉鎖されており、また調査には高度なケービング技術を要するため最近の生息状況は未調査である。減少の要因としては、洞窟内部および周辺の森林の乾燥化による影響が考えられる外、マニアによる過剰採集やトラップの放置なども脅威となっている。

【保全上の留意点】

蛇穴の環境をこれ以上悪化させないこと、周辺の森林の乾燥化を防ぐことが必要である。蛇穴は縄文前期の遺跡があることから国指定の天然記念物に指定されているが、入洞に規制はない。今後各方面の関係者、専門家を交えて、洞窟動物の保全対策について、検討する必要がある。

【特記事項】

東海地方の特産種であり、県内の絶滅は種の絶滅に直結する。東三河ならびに静岡県西部にかけて近縁の別種が記載されているが、本種と詳細な関連について十分な研究がされていない。

【関連文献】

S. Uéno, 1955. New cave-dwelling Anchomenids of Japan. Opusc. Ent., 20: 56-64., pl.1. 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ホラズミヒラタゴミムシ Jujiroa troglodytes S.Uéno

【選定理由】

豊橋市の蛇穴を基準産地として記載された種で、東海地方の固有種であるが、近年生息の確認例が減少している。

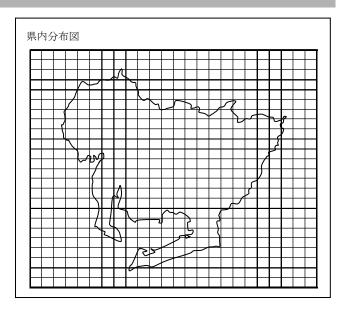
【形態】

体長 $11.5\sim12.5$ mm。体色はアメ色で、複眼は退化傾向にあり、小さい。頭部は複眼の位置で最も幅広。前胸背側縁は弓状に湾曲し、基部でよく収縮する。上翅は基部孔点を欠き、第 3 間室の孔点は $2\sim3$ 。各脚は長く細い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市の蛇穴および新穴周辺の特産種。



【生息地の環境/生態的特性】

洞窟あるいは、地中性。洞窟内部の石下などから発見される他、洞窟周辺の林床、地下浅層からも発見される。主要な生息地は地下浅層であると推定される。

【現在の生息状況/減少の要因】

基準産地の蛇穴では発見が困難になっている。新穴では現在、入り口が閉鎖されており、また調査には高度なケービング技術を要するため最近の生息状況は未調査である。洞窟以外でも、晩秋に近くのため池畔の地下浅層が表れた場所で少なくない個体が採集されたこともある。減少の原因、あるいは採集が困難になった原因には、洞窟を含む森林の乾燥化が考えられる外、マニアによる過剰採集やトラップの放置なども脅威となっている。

【保全上の留意点】

蛇穴の環境をこれ以上悪化させないこと、周辺の森林の乾燥化を防ぐことが必要である。蛇穴は縄文前期の遺跡があることから国指定の天然記念物に指定されているが、入洞に規制はない。今後各方面の関係者、専門家を交えて、洞窟動物の保全対策について、検討する必要がある。

【保全上の留意点】

豊橋市の蛇穴および新穴周辺の特産種特産種であり、県内の絶滅は種の絶滅に直結する。

【関連文献】

S. Uéno, 1955. New cave-dwelling Anchomenids of Japan. Opusc. Ent., 20: 56-64., pl.1. 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

クビボソコガシラミズムシ Haliplus japonicus Sharp

【選定理由】

県内においては 1957 年に新川町から記録されており、平野部から丘陵地に生息したと推測されるが、平野部における多様な水域の減少で生活の場を失ったと考えられ、近年の生息情報がない。

【形 能】

体長 2.8~3.4mm。体は楕円形で淡黄褐色、上翅の肩部は側方へあまり拡がらない。頭頂の点刻は密。

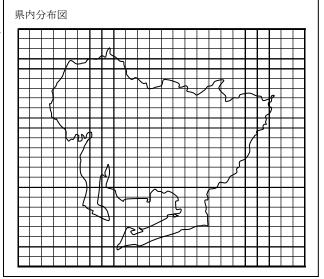
【分布の概要】

【県内の分布】

かつては平野部に普通であったとされるが、 穂積・佐藤(1957)によって清洲市(旧新川 町)からの記録がのこされているのみである。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。



【生息地の環境/生態的特性】

河川のワンドや自然豊かな池沼、水田、休耕田などに生息する。

【現在の生息状況/減少の要因】

宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布や生活汚水による影響を強く 受けたことが考えられる。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニの影響による水域環境の悪化も影響があったかもしれない。

【保全上の留意点】

現在ある自然状況に近い池や水辺環境をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

穂積俊文·佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.

【関連文献】

中根猛彦, 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32 (2): 61-67.

佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.

ヒメコガシラミズムシ Haliplus ovalis Sharp

【選定理由】

平野から丘陵地の池沼に比較的普通に生息する種であったが、多くの水生昆虫同様に著しく減少していると考えられる。

【形 態】

体長 **4~4.3mm**。体は長楕円形で黄褐色。上翅会合線に沿った黒色部は細く、合着した中央の紋は円形であまり大きくならなく、基部の横紋を欠く。

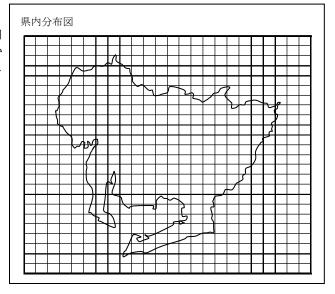
【分布の概要】

【県内の分布】

岡崎市(穂積・佐藤, 1957)、豊田市(豊田市自然愛護協会, 1996)等の記録がある。かつては平野部から丘陵地に広く分布していたと推測される。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。



【生息地の環境/生態的特性】

水草豊かな池に生息するが、生態については何も判っていない。

【現在の生息状況/減少の要因】

宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布や生活汚水による影響を強く 受けたことが考えられる。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニの影響による水域環境の悪化も影響があったかもしれない。

【保全上の留意点】

現在ある自然状況に近い池や水辺環境をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

穂積俊文·佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10. 豊田市自然愛護協会, 1996. (仮)豊田市広瀬台住宅開発事業自然環境調査報告書.

【関連文献】

中根猛彦, 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32 (2):61-67.

佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.

(国:リスト外)

AICHI: NT (JAPAN: -)

愛知県: 準絶滅危惧

ムツボシツヤコツブゲンゴロウ Canthydrus politus (Sharp)

【選定理由】

水草の繁った良好な自然環境の池がほとんどなくなり、生息場所を失った。池への汚水、農薬の流入も生活をおびやかしている。

【形態】

体長 2.4~2.6mm。体は逆卵形。背面は黄~オレンジ色で強い光沢がある。上翅は肩部から下方に 1 紋、その内方に中央前まで拡がる 1 紋、中央後の会合部に横長の 1 紋がある。体下面、肢などは赤褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

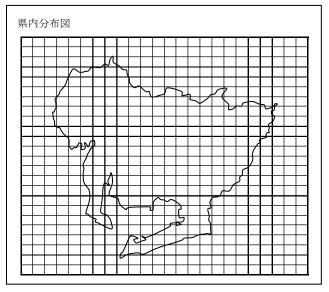
平野部の池に多く見られたが、現在は激減 している。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



【生息地の環境/生態的特性】

池沼で浅瀬の植物が繁茂している水域に見られ、特に夏期に多い。

【現在の生息状況/減少の要因】

植物が繁茂したような自然豊かな池が失われてしまったこと、また水田からの農薬の流入などが考えられる。

【保全上の留意点】

自然豊かな池やその周りの湿原環境の復元と、現在ある止水域のこれ以上の開発抑制が必要である。また、アメリカザリガニなどの駆除が必要である。

【関連文献】

北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 51. 文一総合出版.

キボシチビコツブゲンゴロウ Neohydrocoptus bivittis (Motschulsky)

【選定理由】

熱帯系の種として分布の北限であり、農薬使用などの水質環境の悪化によって生活場所も失いつつある。

【形態】

体長 3~3.4mm。体はやや長い逆卵形。頭・前胸背は淡赤褐色。上翅は暗黒褐色で、側縁は幅広く淡赤褐色となり中央前と 3/4 付近で内方に広がり翅端に達する。体下面は赤褐色。上翅は 9 条のやや強い点刻列を具える。

【分布の概要】

【県内の分布】

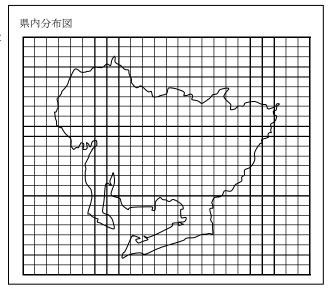
知多半島の河和付近にある池だけから記録 されている。

【国内の分布】

本州 (中部以西)、九州。

【世界の分布】

台湾、中国、タイ、ミャンマー、ベトナム、インド。



【生息地の環境/生態的特性】

池の周辺で植物がよく茂った浅瀬に生息している。生態については何も判っていない。

【現在の生息状況/減少の要因】

生息している池は従来と変わらない様子であるが、確実に個体数が減少している。周辺から流入 する水質の悪化とも考えられる。

【保全上の留意点】

護岸を止め、生息できる池とその周辺の植生を含めた多様性のある池の保全が必要である。

【関連文献】

佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4. 北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 47. 文一総合出版.

愛知県:準絶滅危惧 (国:準絶滅危惧) AICHI: NT (JAPAN: NT)

トダセスジゲンゴロウ Copelatus nakamurai Guéorguiev

【選定理由】

河川の伏流水が湧き出してつくる水溜りのような不安定な水域に生息する種で、国内でも局地的にしか分布しない生息基盤が脆弱な種ある。県内では、庄内川のみから確認されていたが、河川改修などによる治水対策によって、生活場所である氾濫源湿地が減り、最近の生息情報が途絶えている。

【形 態】

体長 4~4.5mm。体は長楕円形で扁平。背面は暗赤褐色で前頭、前胸両側は淡色となる。上翅は第 1~2 間室と第 4~第 7 間室は黒色となるが両端には達しなく、7 条溝と 1 亜外縁溝を有し、間室は細点刻を装い光沢がある。体下面は橙褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

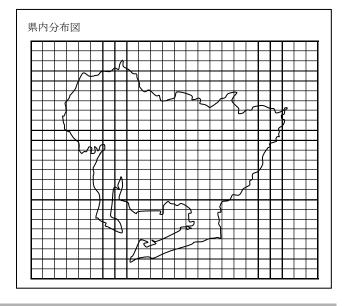
庄内川中流域のみから記録されている。

【国内の分布】

本州。

【世界の分布】

日本の特産種。



【生息地の環境/生態的特性】

河川敷で伏流水が湧き出てできた水溜りのような不安定な水域に生息する。干上がっているとき は泥の割れ目等で見つかることがある。

【現在の生息状況/減少の要因】

河川改修、特に護岸の構築によって本種の生息環境となる水域が失われた。

【保全上の留意点】

不安定な河川敷に生息することから、時折の洪水による氾濫が生息場所を作っているようである。

【関連文献】

Satô, M., 1988. A new species of the Dytiscid genus Copelatus (Coleoptera) from Japan. Elytra, 16 (2): 123-125. 北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 115. 文一総合出版.

シマゲンゴロウ Hydaticus bowringi Clark

【選定理由】

かつて県内各地の池、水田などいろいろな水域に生息し、決して珍しい種ではなかったが、各種 開発に追われ、限られた地域に細々と生息するのみとなっている。

【形 態】

体長 13~14mm。体は卵形でよく膨隆し、光沢がある。頭・前胸背は淡黄褐色で、それらの後縁中央は黒色。上翅は黒色で、中央と側縁近くに淡黄縦条があり後方で合一し、基部に円紋がある。 体下面は黄~赤褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

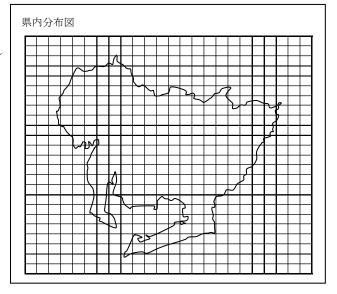
平野部の池を主体に広く分布していたが、 現在では丘陵部に残された池や水田に生息し ているに過ぎない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、トカラ列島。

【世界の分布】

中国、台湾、朝鮮半島。



【生息地の環境/生態的特性】

各種の池、水田などの比較的いろいろな水域に生息していた。夏期にはよく灯火へも飛来する。

【現在の生息状況/減少の要因】

平野部からは姿を消し、丘陵の自然豊かな池にその姿を見ることができる。農村の老齢化による 水田の放棄、池の消失、汚水の流入などによって減少していると思われる。

【保全上の留意点】

放棄水田の造成をやめ、残された丘陵での自然池の保全。平野部での自然豊かな池の造成ができれば復元が期待できる。また、アメリカザリガニ等の外来種の駆除を進める必要がある。

【関連文献】

北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 143. 文一総合出版.

愛知県: 準絶滅危惧 (国:リスト外)

INSECTA < COLEOPTERA GYRINIDAE> AICHI: NT (JAPAN : --)

コオナガミズスマシ Orectochilus punctipennis Sharp

【選定理由】

河川の中流域に生息する種で、河川の汚濁などによって一時絶滅状態にあったと考えられていた。 1990 年代以降に庄内川、豊川で現存しているのが確認されたが、生息基盤は脆弱である。

体長 5.5~6mm。体は長楕円形で黒くやや金属光沢を帯びる。肢などの付属物は赤褐色。上翅の 点刻は密で、♂の会合部先端はほぼ直角で先が丸まり、♀ではやや斜めで会合端が少し後方に張り 出す。

【分布の概要】

【県内の分布】

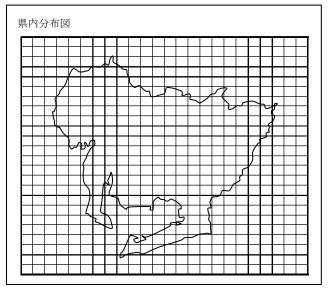
名古屋市内山崎川、名古屋市庄内川、豊田 市矢作川、豊田市(旧稲武町)月ヶ平、豊橋 市豊川で記録がある。このうち庄内川、矢作 川、豊川では現在でも健在と考えられる。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本の特産種であるが、ごく近似の種が、 琉球、台湾に分布している。



【生息地の環境/生態的特性】

大きい河川の中流域で、岸辺が水でおおわれているような環境に生息している。夜間活動性で、 昼間はその姿をほとんど見ない。

【現在の生息状況/減少の要因】

矢作川では多くの生息地が確認され、県内では恐らく最も安定した生息地域と考えられるが、他 では非常に少ないと思われる。夜行性であるため、生息状況の調査が十分に行き届いていない可能 性もある。河川、特に中流域の水質汚濁、環境の変化などが減少の要因である。

【保全上の留意点】

中流域における自然河岸の保全と支流からの汚水流入の規制。また、本種の生息域になるような 環境にオオクチバス、コクチバス、ブルーギルなどの侵略的外来種が侵入しないようにする必要が ある。

佐藤正孝, 1977. 日本産ミズスマシ科概説, 3. 甲虫ニュース, (39): 1-4.

穂積俊文·佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.

佐藤正孝・成瀬義一郎, 1963. 矢作川流域の水生甲虫類. 矢作川の自然: 163-172. 名古屋女子大学.

豊田市, 2005. 豊田市自然環境基礎報告書.

豊橋市,1999. 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書.

ヤマトホソガムシ Hydrochus japonicus Sharp

【選定理由】

平野部の池、沼、水田に生息する種であるが、多くの水生昆虫同様に生息地の消失、悪化によって著しく減少していると考えられる。

【形態】

体長 $2.5\sim3$ mm。体は長く両側はほぼ平行で、黒色で上翅は暗褐となるが緑〜藍色の金属光沢を有する。付属物は黄褐色。前胸背には $5\sim6$ 個の凹陥があり、上翅は粗大点刻列を具える。体下面は光沢を欠き絨毛状となる。

【分布の概要】

【県内の分布】

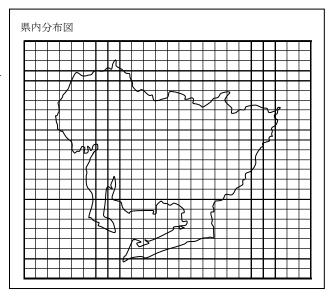
豊田市広野町(広, 1963; 1966)、岡崎市、 名古屋市(穂積・佐藤, 1957)の記録がある。 かつては平野部の止水域に広く生息していた と推測される。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

東南アジア。



【生息地の環境/生態的特性】

水草が豊富に生育する池沼、水田などに生息する。成虫は時として灯火に飛来する。

【現在の生息状況/減少の要因】

県内での最近の記録は見かけない。宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布や生活汚水による影響を強く受けたことが考えられる。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニの影響による水域環境の悪化も影響があったかもしれない。

【保全上の留意点】

現在ある自然状況に近い池や水辺環境をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

広 正義, 1963. 矢作川の水生昆虫. 矢作川の自然: 84-142.

広 正義, 1966. 矢作川水系における水生昆虫の群生生態学的研究. 名古屋女子大学紀要, 12:77-206.

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.

【関連文献】

佐藤正孝, 1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース, (40): 1-3.

愛知県:準絶滅危惧 (国:リスト外)

AICHI: NT (JAPAN: -)

アラメエンマムシ Zabromorphus punctulatus (Wiedemann)

【選定理由】

情報不足ではあるが、草地のアリに依存するものと思われる。大型のエンマムシ類は全国的にも減少傾向がみられ、本種も減少している可能性が高い。

【形態】

体長 7.9~8.5mm。ツヤのある黒色。前胸背と上翅が密に点刻されることから他のエンマムシ類と容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

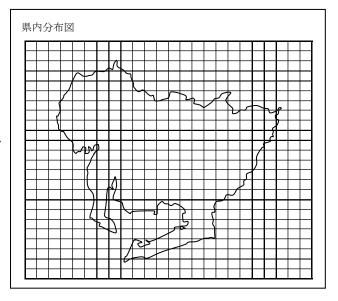
北名古屋市で一例の採集例がある。

【国内の分布】

本州、九州に分布する。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島、インドネシア(ジャワ)、 フィリピンに分布する。



【生息地の環境/生態的特性】

河川敷や池の周りから採集される。詳細は不明であるが、アリとの関係が深いらしい。

【現在の生息状況/減少の要因】

河川敷などの草地で見つかることがほとんどのため、草地の減少、環境の悪化が要因しているものと思われる。

【保全上の留意点】

河川改修などにより湿潤な草地が無くなれば、本種の発見はより難しくなる。自然のままの河川 敷草地の保全が必要である。

【関連文献】

大原昌宏, 1966. 日本産エンマムシ上科解説IV. 甲虫ニュース, (116): 8. 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫、愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ヤマトケシマグソコガネ Psammodius japonicus Harold

【選定理由】

本種を含む海浜の砂浜に依存する甲虫は、砂浜の減少や護岸の影響を非常に強く受ける。県内の砂浜は改修が進み、また砂の流出による砂浜の縮小によって生息基盤が脅かされている。

【形態】

光沢の強い黒色。前胸背板は強い点刻を疎らに散布し、側縁の刺毛を欠く。上翅上溝は細く、間室は幅広い。肩歯を欠く。

【分布の概要】

【県内の分布】

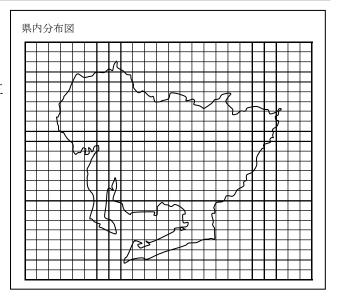
豊橋市、常滑市。

【国内の分布】

北海道、本州、隠岐諸島、四国、九州、五島列島、対馬。

【世界の分布】

日本の固有種である。



【生息地の環境/生態的特性】

海浜の砂地に生息する。他のケシマグソコガネ類のように、植物の根際より見いだされることは 少なく、海藻や流木などの漂着物の下から見つかる。

【現在の生息状況/減少の要因】

豊橋市の海岸では比較的容易に発見されるが、知多半島では発見が困難になってきている。

【保全上の留意点】

砂浜に打ち上げられた海草や流木下に生息する種であるので、こうした漂流物が海岸清掃などで撤去されないよう、海岸清掃の際の教育啓蒙も必要であろう。

【関連文献】

川井信矢ほか, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群1:166. 昆虫文献六本脚. 藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 58-59. コガネムシ研究会.

愛知県: 準絶滅危惧 (国:情報不足) AICHI: NT (JAPAN:DD)

アカマダラハナムグリ *Poecilophilides rusticola* (Burmeister)

【選定理由】

平地から低山地に生息する珍しいハナムグリ類。県内では、少ないながら広い範囲で記録がある。 猛禽類(ワシ・タカ類)の巣中に幼虫が見つかることが知られ、営巣の減少により個体数も減って いるようである。

【形態】

体長 14~20mm。赤褐色で小黒点を散在する。腹面は、赤褐色の中胸突起を除き黒色。生時、新 鮮な個体は鮮やかなオレンジ色であるが、標本になると黒ずんでしまうことが多い。 前脛節の外歯は2個。上翅には9~10条の縦条がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

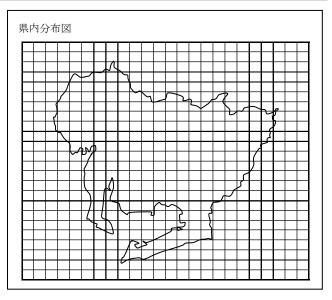
名古屋市、豊田市、蒲郡市、豊川市、豊橋 市から記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

済州島、朝鮮半島、シベリア東部、中国、 モンゴルに分布する。大陸産は別亜種 P. rusticola sinensis (E.Saunders) に分類さ れる。



【生息地の環境/生態的特性】

平地から低山帯にかけての雑木林に生息する。成虫は5月から8月にかけて出現し、アベマキ、 コナラなどの樹液に集まる。他県では、晩夏に多数の個体が集団となって発見された例がある。最 近、猛禽類(ワシ・タカ類)の巣中で幼虫が集団で発見され、猛禽類の巣が本種の重要な発生場所 であることが明らかになった。

【現在の生息状況/減少の要因】

都市化や平野部の里山の雑木林の荒廃により、猛禽類(ワシ・タカ類)の営巣が減少したことに 関連して減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

猛禽類(ワシ・タカ類)の保全が必要であるが、そのためにはまず里山の雑木林の荒廃を防ぐ手 だてが必要である。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県. 酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群1:95. 昆虫文献六本脚. 藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 113. コガネムシ研究会.

愛知県:準絶滅危惧 (国:リスト外)

AICHI: NT (JAPAN: -)

クロカナブン Rhomborrhina polita Waterhouse

【選定理由】

かつて東三河地方を中心に広く分布し、アベマキの樹液などに多くの個体数が観察されたが、近年発見がやや困難になってきていることから、個体数が減少しているものと推測される。

【形態】

体長 25.6~32.6mm。全身漆黒。頭循は皮革状で点刻は密。前胸背板にはほとんど点刻が無く、上翅は浅く細かい点刻を散布する。中胸突起は幅よりやや弱く、先端はやや拡大して裁断状。後脛節内側の毛は赤褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

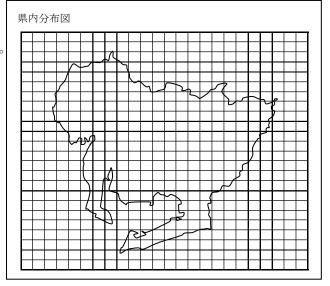
設楽町、新城市、豊川市、豊橋市、岡崎市、 蒲郡市などの丘陵地から山地に分布している。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本の固有種である。



【生息地の環境/生態的特性】

丘陵地から山地にかけて生息し、あまり高標高地には生息しない。成虫の出現は、7月~9月初め、カナブンやアオカナブンより出現がやや遅い。日中活発に活動し、アベマキ、コナラなどの樹液の他、花や熟した果実にも集まる。幼虫は、朽ちた倒木の中から発見される。

【現在の生息状況/減少の要因】

現在では、かつて多産した豊田市や豊橋市、岡崎市などで発見が困難になってきている。 はっきりした減少の要因は不明であるが、里山の雑木林の荒廃、森林の乾燥化などによる影響が背景にあると推測される。

【保全上の留意点】

宅地開発や里山雑木林の荒廃を防ぐ手だてが必要であろう。今後とも詳細な調査の継続と、生活 史の解明などを進め、減少の要因を探る必要がある。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県. 酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群1:88. 昆虫文献六本脚.

藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 112. コガネムシ研究会.

愛知県: 準絶滅危惧 (国:リスト外)

INSECTA < COLEOPTERA SCARABAEIDAE> AICHI: NT (JAPAN : -)

ヤマトアオドウガネ Anomala japonica Arrow

【選定理由】

本種を含む海浜の砂浜に依存する甲虫は、砂浜の減少や護岸の影響を非常に強く受ける。県内の 砂浜は改修が進み、また砂自体の流出による砂浜の減少、それに伴う海浜生植物の生育場所の減少 などにより生息基盤が脆弱化している。

【形 態】

体長 17.0~26.0mm。腹面は赤銅色、背面は緑色から銅褐色。上翅の側縁隆起は後半 2/3 で消失 し、その後から側縁膜が始まる。腹部両側には長束毛があり、前尾節板の後縁には短毛を疎らに装 う。

【分布の概要】

【県内の分布】

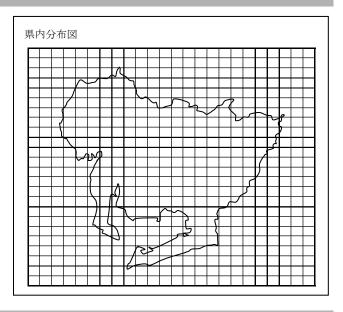
豊橋市、田原市、常滑市。

【国内の分布】

本州、佐渡島、隠岐諸島、伊豆諸島、四国、 九州 五島列島、屋久島。

【世界の分布】

日本の固有種である。



【生息地の環境/生態的特性】

海岸よりの地域に多い。幼虫は砂地の流木下や草本の根際から見つかる。灯火によく飛来する。

【現在の生息状況/減少の要因】

砂浜のある海岸部近隣では比較的見られるが、近似のアオドウガネにおされているようである。 砂浜の護岸などにより、生育場所である砂浜から続く草地自体が減少している。

【保全上の留意点】

砂浜の保全は当然であるが、砂浜から続く草地の保全が重要で必要である。

【関連文献】

酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群1:47. 昆虫文献六本脚. 藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 104. コガネムシ研究会.

ミヤモトアシナガミゾドロムシ Stenelmis miyamotoi Nomura et Nakane

【選定理由】

河川の中流~下流域の瀬などに生息する種であるが、河川の汚れや河川改修による生息地の破壊、 悪化によって生息の場を失いつつある。

【形態】

体長 2.7~3.1mm。体は長く、黒褐色。上翅は前胸背より僅かに広いが、肩は丸まり、第 1 点刻 列は基部で2叉しない。第5間室は稜状に隆起する。前胸腹板前縁中央に小歯を有する。

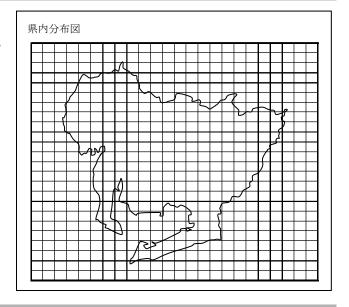
【分布の概要】

【県内の分布】

矢作川、乙川、豊川などで確認されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。



【生息地の環境/生態的特性】

比較的大きな河川の中流から下流域の瀬などで水中に沈んでいる倒木に付着している。生態につ いては何も判っていない。

【現在の生息状況/減少の要因】

矢作川では生息地が多い。豊川では1990年代は多く見られたが、この数年は未確認。支流からの 汚水の流入による水質悪化と河川改修、護岸整備などによる生息環境の消失、悪化が減少の要因と 考えられる。

【保全上の留意点】

河川中流域での岸辺の改良が必要、瀬の再現。支流からの汚水流入防止など。

【関連文献】

吉富博之ほか, 1999. 矢作川水系のヒメドロムシ. 矢作川研究, (3): 95-116.

愛知県:準絶滅危惧 (国:絶滅危惧Ⅱ類) AICHI:NT (JAPAN:VU)

ヨコミゾドロムシ Leptelmis gracilis Sharp

【選定理由】

河川の中流~下流域の瀬、ワンドなどに生息する種であるが、河川の汚れや河川改修による生息地の破壊、悪化によって生息の場を失いつつある。特に生活環境として良好な水質を必要とするため、生活域が狭められ分布が限定されるようになった。

【形態】

体長 2.6~3mm。体は長く、暗褐色。眼は大きな前頭の幅の約半分。前胸背板の前縁から 1/3 近くを横切る溝を有し、後半には両側に斜めの溝がある。上翅の肩部は丸まり、後翅は退化している。 肢は長く、爪は大きい。

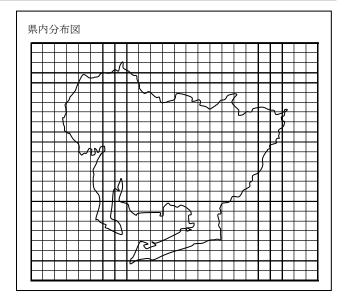
【分布の概要】

【県内の分布】

矢作川と豊川の中・下流域に生息する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。



【生息地の環境/生態的特性】

湧水のある池や河川の中・下流域の瀬、河川敷内の遊水池などで、水草や水中に沈んでいる倒木などにしがみついているのが見つかる。いずれも湧水などがあり、良好な水質を必要とする。

【現在の生息状況/減少の要因】

矢作川では比較的生息地が多い。豊川では 1990 年代は多く見られたが、生息環境が変わってしまい、この数年は未確認。支流からの汚水の流入による水質悪化と河川改修、護岸整備などによる生息環境の消失、悪化が減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

河川敷内にある湧水のある遊水池の保全が必要。特に河川改修時には十分な配慮が必要である。

【関連文献】

吉富博之ほか, 1999. 矢作川水系のヒメドロムシ. 矢作川研究, (3): 95-116.

豊橋市, 1999. 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書.

トゲフタオタマムシ Dicerca tibialis Lewis

【選定理由】

県内での生息基盤が脆弱で、主要生息地である豊田市猿投山等の環境悪化が懸念される。

【形 態】

体長 15mm 前後。黒褐色で、黒紫または緑色の金属色を帯びる。上翅端部はわずかにえぐれ、両側が歯状に突出する。オスの中けい節には内方に鋭く細長い棘がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

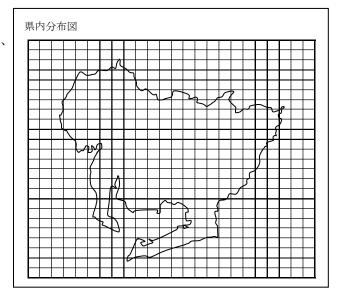
豊根村(大平ほか, 1980;蟹江・戸田, 2008)、 鳳来町(大田, 1982)、豊田市(河路, 1985) などの記録がある。

【国内の分布】

本州 (関東以西)、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



【生息地の環境/生態的特性】

モミ、スギ、ヒノキなどの針葉樹を寄主植物とするが、植林地での発見例は県内ではないようである。成虫は4月~7月に出現。スギの樹皮下などで成虫越冬する。

【現在の生息状況/減少の要因】

主要な寄主植物であるモミそのものが県内では、少ないためにもともとの個体密度は低いものと思われる。豊田市と瀬戸市の境にある猿投山は県内でもっとも良く知られた生息地であるが、近年山林の乾燥化、それに伴うモミ林の衰退によって本種の生息が脅かされている。奥三河地方には広く分布していると思われるが、詳細な分布状況は現在のところ不明である。

【保全上の留意点】

モミ林を伴う自然林の保全。枯死木または枯枝は、特に危険がない限り林内に放置し、産卵場所 を確保する。

【特記事項】

猿投山には本種以外にもモミに依存する多くの昆虫が生息しているが、その多くは周辺の生息地から孤立した状態にある。大都市名古屋近郊でこのような自然度の高い森林が残っていることは、 存在そのものが貴重であり、保全に万全をきたす必要がある。

【引用文献】

大平仁夫・松野更一・山崎隆弘, 1980. 愛知県豊根村の動物, 鞘翅目: 195-220. 大田佳伸, 1982. 南設楽郡鳳来町でトゲフタオタマムシを採集. 三河の昆虫, 28: 119. 蟹江 昇・戸田尚希, 2008. 愛知県のタマムシ. 佳香蝶, 60 (234): 207-230. 河路掛吾, 1985. 愛知県内で採集したタマムシ 3 種. 佳香蝶, 37 (142): 30.

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ジュウジミズギワコメツキ Fleutiauxellus cruciatus (Candèze)

【選定理由】

本種は本州の関東地方から近畿地方(兵庫 県)にかけての大きな河川の河川敷きの下流 域に分布する種であるが、河川敷きの整備や 水と水辺の汚濁などの影響を受けて、生息地 が減少したり消滅しているところが多い。ま た、本種は河川敷きの自然環境を示す指標種 としても重要な種である。

【形態】

体長は3.5~5mm 内外で、雌は一般に大形になり、体長が7mm 近くになるのがいる。体はやや偏平で光沢を有し、触角は黒色~黒褐色で肢は黄褐色。上翅は翅底近くと翅端近くに図示したような橙赤色の斑紋を有する。前胸背板は顆粒状の隆起物を密に生じ、正中部には平滑縦隆線を有する。



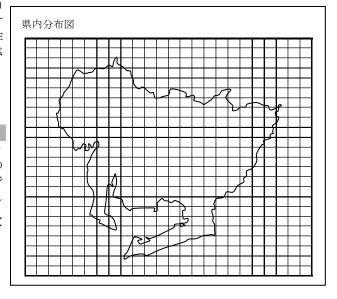
¥ 豊橋市加茂町, 1990 年 6 月 3 日, 大平仁夫 採集

【分布の概要】

愛知県では矢作川下流域(西尾市〜岡崎市)と豊川の下流域(豊川市〜豊橋市)に分布することが知られていたが、最近になって矢作川ではより上流域の豊田市南部地域に分布が見出された(岩月,2007)。

【生息地の環境/生態的特性】

愛知県で本種が生息する河川は、矢作川と 豊川の下流域のみである。矢作川の下流域の 河川敷きは砂地帯であるが、豊川の下流域で は砂礫の河川敷があって、本種の生息に適し た環境にある。幼虫も砂礫中に生息しており、 成虫は周辺にあるヤナギ類に発生しているア ブラムシ類の甘露に集まっている。



【現在の生息状況/減少の要因】

豊川の豊川市から豊橋市に河川敷きでは、現在でも点々と発生地があり、往時より個体数は減少しているが、まだ小集団を維持している。矢作川河川敷きでは、西尾市と岡崎市内の大部分では発生が見られなくなっているが、より上流域の豊田市の一部地域でまだ若干の個体が見出されている。

【保全上の留意点】

本種の生息には砂礫のある清潔な河川敷きの存在が必要で、河川の水の汚濁を防ぎ、清潔な砂礫の環境を維持するとともに、周辺のヤナギなどの灌木で、成虫がアブラムシの甘露で栄養をとる環境があることも必要である。

【引用文献】

岩月 学, 2007. 矢作川流域のジュウジミズギワコメツキの生存記録. 三河の昆虫, (54): 650-651.

【関連文献】

大平仁夫, 1991. 愛知県から 30 数年ぶりに採集されたコメツキムシ2種. 三河の昆虫, (38): 320-321.

愛知県: 準絶滅危惧

(国:リスト外)

AICHI: NT (JAPAN : -)

サトヤマシモフリコメツキ Actenicerus kidonoi Ôhira

【選定理由】

本属の種は愛知県に7種分布しているが、 本種は 2006 年に愛知県原産の新種として記 載された大形種である。本種の生息環境は里 山周辺にあるので、人為作用による土地整備 などによって、生息地が失われる可能性が高 い種である。

【形態】

体長は17~19mm。体は船形でやや偏平状。 黒色で鈍い真鍮色の金属光沢を有し、体背面 は灰黄色と褐色毛を混生し、上翅は体毛によ るまだら状の斑紋を生じる。触角は黒色、肢 は黄褐色~暗黄褐色で、脛節とふ節は黄褐色 ~暗黄褐色を呈する。また、前胸背板と上翅 の側縁部は暗褐色を呈すので、一見してやや 褐色をおびた外観を呈する(Ôhira, 2006)。



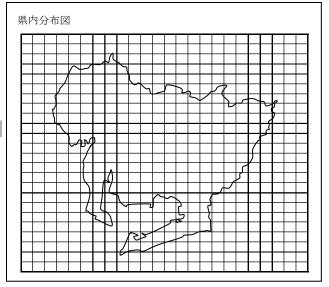
岡崎市鳥川町,2007年5月15日,大平仁夫 採集

【分布の概要】

原記載で扱われた完模式標本は岡崎市桑原 町産であるが、新城市、豊川市、豊橋市など 主として三河地方を中心とする里山周辺に分 布が知られている。

【生息地の環境/生態的特性】

成虫は休耕田を含む湿潤地のある里山周辺 で見出されているが、幼虫もその周辺の土壌 中に生息すると思われる。成虫は4月から5 月にかけて現れ、周辺の樹木の葉上やフジの 花やコナラの新芽などに飛来している(大平, 2008)



【現在の生息状況/減少の要因】

現在は主として里山の谷間の湿潤地に点々と小集団で発生しているが、このような場所は開発や 土地整備などの影響を受けやすいため、生息適地が減少している。

【保全上の留意点】

本種は人里周辺の里山の湿潤地に分布し、幼虫もその土壌中に生息しているため、土地整備など の影響を受けやすい。しがって、ため池~湿地~水田~周辺の雑木林などの自然環境を一体化して、 そこの生物多様性を高めることが必要である。

Ôhira, H., 2006. New or Little-known Elateridae from Japan, XLIX. Elytra, Tokyo, 34: 337-342. 大平仁夫, 2008. 三河地方が原産のサトヤマシモフリコメツキについて. 鳳来寺山自然科学博物館館報, (37): 1-2.

アカアシコ八ナコメツキ Paracardiophorus sequens (Candèze)

【選定理由】

本種は海浜砂浜性で、乾燥した砂浜に生え ているハマヒルガオなどの根株周辺で見いだ される種である。愛知県では伊勢湾台風のの ち、海浜の護岸工事があちこちで行われたた め、砂浜の多くが減少した。また、最近では 三河湾の海岸造成が大規模で行われており、 そこでも多くの砂浜が消滅している。その他、 各地で海岸への漂着物が多くなり、清潔な砂 浜が減少している。本種は海浜の砂浜の自然 環境を知る指標種としても重要である。

【形態】

体長は5mm内外、雌はときに体長が7mm に達する。体は黒色で上翅はやや虹色の光彩 を有する。触角は黒色で肢は黄橙色を呈し、 腿節とふ節の第5節は暗褐色を呈する。



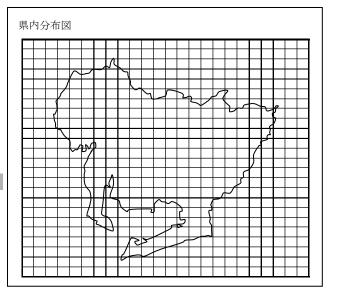
田原市伊良湖岬,2002年8月3日,大平仁夫 採集

【分布の概要】

本種は北海道から九州の各地の海岸線に沿 って広く分布する種であった。しかし、現在 は海浜砂浜の汚濁や各地の護岸工事などで、 良好な砂浜が失われ、全国的にも絶滅が心配 されている種になっている。また、愛知県で は、渥美半島の内側で大規模な港湾造成工事 が行われており、そこでの発生地の大部分は 失われている。ただ、三河湾島嶼では、まだ 砂浜が残っていて、そこでの減少は少ない。

【生息地の環境/生態的特性】

本種は乾燥した海浜砂地性の種で、成虫は そこに生えている草の根株周辺に生息し、そ の砂地中で幼虫も育っている。従って、その 砂浜が漂着物などで汚染されたり、護岸工事 などで失われると、生息できなくなる。



【現在の生息状況/減少の要因】

往時は各地の海岸砂浜に普通に見られた種であるが、現在では生息できる砂浜は減少していて、 むしろまれな種になっている。

【保全上の留意点】

本種が生息する清潔な砂浜を保全して、生息地でのこれ以上の個体数の減少を防止することが必 要である。また、人為的に砂浜を再生することも重要と思われる。

【関連文献】

浅岡孝知, 2003. 豊橋市金色島の昆虫. 三河の昆虫, (50): 543-546.

大平仁夫, 1997. 日本産コハナコメツキとそのその近似種について(甲虫目:コメツキムシ科). 比和科学博物館研究報告, (35): 1-16, 14pls.

オカモトツヤアナハネムシ Pedilus okamotoi (Kôno)

【選定理由】

本種は全国的にも稀少な種であり、生息地も局地的な種である。生息地は通常豊かな自然林内に限られ、周辺の伐採やそれに伴う乾燥化に対して減少することが危惧される。

【形態】

体長 7.5~9.5mm。全身黒色でツヤがあり、雄の上翅後方に強い裂開状の彫刻がある。触角は雄で櫛ヒゲ状、雌は単純。

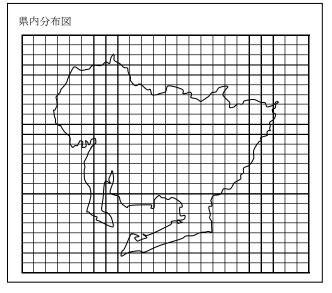
【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町(山崎, 1978)、豊田市(旧稲武町) (蟹江, 1989) から記録され、ほかに豊根村 の標本がある。

【国内の分布】

本州、九州、四国。



【生息地の環境/生態的特性】

生息地は自然林内の谷筋などの湿潤な環境に限られる。成虫は 6 月に現れ、下草上を緩やかに飛翔し苔むした古い倒木に集まる。幼虫はブナ類などの腐朽した倒木に穿孔し小動物を捕食したり時には菌類を食べたりしているものと思われる。

【現在の生息状況/減少の要因】

本種の生息には豊かな自然林と湿潤な環境が欠かせない。近年ではクワガタムシの採集のために ブナなどの倒木や朽ち木を破壊する行為が目立ち、本種ならびにこれらを食樹とする多数の貴重な 昆虫たちの生息を脅かしている。

【保全上の留意点】

豊田市稲武町では県道に面する林縁の伐採について配慮が必要。林縁の灌木は林内へ直接風が吹き込むのを和らげ排気ガスの進入を防いでいる。

【引用文献】

山崎隆弘, 1978. 三河地方で採集した珍しい甲虫. 三河の昆虫, 3:9-11. 蟹江 昇, 1989. 愛知県面ノ木峠で採集した甲虫. 佳香蝶, 41 (157): 7-10.

【関連文献】

大平仁夫ほか, 1996. 第7章 昆虫類. 第1節 昆虫綱 コウチュウ目. 稲武町史 -自然- 資料編: 180-266.

大平仁夫ほか, 1996. 第5章 第4節 (8) コウチュウ類. 設楽町誌 -自然編- 資料編: 449-551.

(JAPAN : -)

AICHI: NT

ミスジナガクチキ Stenoxylita trialbofasciata (Hayashi et Kato)

【選定理由】

全国的にも産地は局地的で稀少な種。ブナ帯の自然林内に生息し県内での生息地は限られている。

【形 態】

体長 9~12mm。体型は細長く、胸部は赤い。上翅は黒く 3条の黄色の横帯がある。

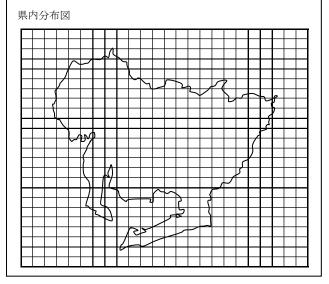
【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町(大平ほか, 1996)、豊田市(旧稲武町)(蟹江, 1989)の2箇所から記録されている。

【国内の分布】

本州。



【生息地の環境/生態的特性】

愛知県では上記 2 箇所の原生林内にのみ生息している。成虫は 6 月に現れ、イヌブナなどの立ち枯れに集まり、幼虫もこれらに穿孔する。個体数は非常に少ない。近年生息情報が途絶えている。

【現在の生息状況/減少の要因】

生息地が狭く限られており、本種の将来的な生息に危機感がもたれている。

【保全上の留意点】

愛知県内のある程度纏まった自然林は上記 2 箇所に限られ、本種をはじめ多くの固有種が生息する。これら地域の開発改変には極めて慎重な配慮が必要である。立ち枯れや倒木なども特に危険のないものは放置することが望ましい。

【関連文献】

蟹江 昇, 1989. 愛知県面ノ木峠で採集した甲虫. 佳香蝶, 41 (157): 7-10. 大平仁夫ほか, 1996. 第5章 第4節 (8)コウチュウ類. 設楽町誌 -自然編- 資料編: 449-551.

【関連文献】

大平仁夫ほか, 1996. 第7章 昆虫類. 第1節 昆虫綱 コウチュウ目. 稲武町史 -自然- 資料編: 180-266.

ケブカマルクビカミキリ Atimia okayamensis Hayashi

【選定理由】

寄主植物であるネズミサシが生育するやせた土地に局所的な分布を示す。県内の主要な生息地は、 尾張地方北部や東三河南部の丘陵地であるが、里山の荒廃や、宅地造成などによって生息地が減少 あるいは悪化している。

【形態】

体長 5.5~8.5mm。青味を帯びた黄白色の毛に覆われた小型のカミキリムシ。上翅には 10~20 程度の黒い小円紋をもつ。

【分布の概要】

【県内の分布】

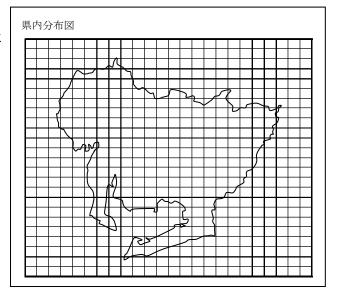
本県では、春日井、犬山など尾張北部および豊橋、新城から確認されている。

【国内の分布】

関東地方以西の本州に生息する。

【世界の分布】

日本の特産種である。



【生息地の環境/生態的特性】

生息地は、いずれもやせた丘陵地で、ネズミサシの自生地。成虫は早春と秋に見られ、ネズミサシの葉上などから発見される。幼虫はネズミサシの衰弱木あるいは枯れ木中で育ち、秋に新成虫となる。

【現在の生息状況/減少の要因】

もともと個体数の多い種ではないが、生息地そのものが宅地造成などによって減少している。また、生息地の多くは、少なからず人による管理が行われてきた里山で、管理放棄による生息地の遷移の進行により生息環境が悪化している。

【保全上の留意点】

生息環境を維持することが重要であるが、背景には、管理放棄による里山の荒廃という社会的な 問題との関連が推定されるので簡単ではない。

【関連文献】

愛知県: 準絶滅危惧 (国:対象外) AICHI: NT

(JAPAN: -)

フタコブルリハナカミキリ Stenocorus coeruleiopennis (Bates)

【選定理由】

関東地方の一部地域や山地では個体数も少なくないが、 県内では珍しく、現在までに 3 例の生息情報しかない。 県内での生息環境の状況については、詳細は不明である が、生息基盤が脆弱であることが推測される。

【形態】

体長 18~24mm で、ハナカミキリ亜科としては最も大 型の部類にはいる。前胸背は黒色の中央部を除いて黄色、 上翅は美しい瑠璃色。



豊田市,2008年6月14日,山崎隆弘 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では、1982年に設楽町駒ヶ原(河路, 1984) で採集された記録が知られるのみであ ったが、「レッドデータブックあいち県民参 加調査」によって、豊田市(旧稲武町)の面 ノ木園地から 2006 年と、豊田市(旧下山村) から 2008 年に新たに確認された。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

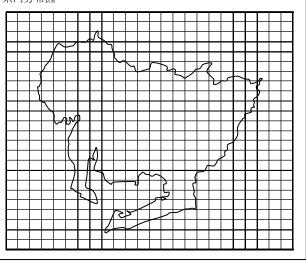
【世界の分布】

サハリンから知られる。

【生息地の環境/生態的特性】

低山地から山地にかけて生息する。神奈川 県などでは低山地での生息地が知られるが、 東海地方ではブナ帯に見られる。成虫は6~8 月に出現し、ノバラ、リョウブ、クリ、ノリ ウツギ等の花に集まる。低木やササなどの割 れ目に産卵し、ふ化した幼虫は地上に落下す る。恐らくその後地中に潜り、低木や草本の 根を食べているものと考えられている。

県内分布図



【現在の生息状況/減少の要因】

県内では 3 例の記録があるのみで、生息密度は低く、生息基盤は脆弱であると考えられる。減少 の要因としては、元々生息密度が低い地域であったのに加え、自然林が減少したことによると推測 される。

【保全上の留意点】

現在確認されている地域を中心に県内に残存する自然林を保全するとともに、詳細な調査の継続 によって、県内の分布と生息密度、絶滅の危険性の程度を明らかにする必要がある。

【特記事項】

本種の色彩は、アオジョウカイに擬態していると考えられており、地方ごとに色変わりするアオ ジョウカイの色彩変異にともなう変化が知られる。全国的には現在絶滅を危惧する状態にはないが、 地域個体群として学術的に興味深い存在である。

【引用文献】

河路掛吾, 1984. 1982 年駒ヶ原高原で採集したカミキリムシ. 三河の昆虫, 31: 155-158.

【関連文献】

トサヒメハナカミキリ Pidonia approximata Kuboki

【選定理由】

太平洋型のブナ林を代表するカミキリムシで、県内では奥三河地方に分布するが、ブナ林の減少や林床の乾燥に弱く、生息基盤が脆弱である。

【形態】

体長 6.4~8.5mm の小型のカミキリムシ。脚は黄色、頭部、胸部は黒色で、上翅は黒地に黄色の紋がある。よく似た近縁種とは上翅の紋の形から区別されるが、類似種が多く同定には注意が必要。

【分布の概要】

【県内の分布】

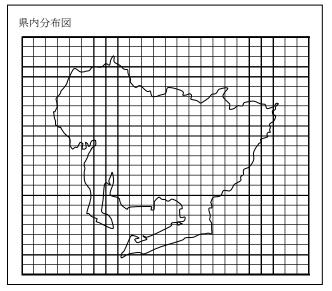
県内で生息が確認されているのは、設楽町、 豊田市(旧稲武町)、豊根村の3カ所に過ぎない。

【国内の分布】

関東以西の本州、四国、九州のブナ帯に分布する。本州の分布は太平洋あるいは瀬戸内海側に限られ、日本海側のブナ林を主要分布域とする近縁種、ミワヒメハナカミキリと住み分けている。

【世界の分布】

日本の特産種である。



【生息地の環境/生態的特性】

ブナ林が主要な生息環境である。成虫は $5\sim7$ 月に出現し、コバノガマズミ、タンナサワフタギなどの花に集まる。

【現在の生息状況/減少の要因】

県内には、ブナ林が非常に限られ、生息基盤そのものが脆弱である。減少の要因にはブナ原生林 の減少が大きい。

【保全上の留意点】

本種は、林内の乾燥化に敏感と考えられ、林の面積の縮小がそのまま本種の生息を脅かすことになると考えられる。ブナ林内の歩道、林道整備には注意が必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、路肩の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【関連文献】

ヒゲブトハナカミキリ Pachypidonia bodemeyeri Pic

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では最近になって豊田市(旧稲武町)から確認されたばかりで、県内での詳細な生息状況は、十分調査されていない。しかしながら、全国的に個体数の少ない稀種であること、本種の生息に足りる環境が県内では極めて少ないことから、生息基盤は、脆弱であると判断される。

【形 態】

体長 11~17mm。全体に暗赤色の中型で太いハナカミキリ。頭部は大きく側頭が著しく発達する。 触角は太短く、オスでも体長の 2/3 程度で、メスでは約 1/2。

【分布の概要】

【県内の分布】

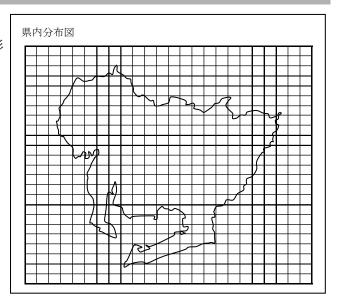
本県では 1993 年に豊田市(旧稲武町)(杉村, 1995)から発見された記録があるのみ。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。



【生息地の環境/生態的特性】

ブナ原生林など自然度の高い森林に生息。成虫は **7~8** 月に出現する。ミズメ、ブナなどの大木にできた樹洞内で生活すると考えられている。

【現在の生息状況/減少の要因】

比較的最近になって生息が確認されたため、過去との生息状況の比較はできない。**1993** 年以降は生息地の環境は見た目には大きな変化はない。過去にさかのぼれば、ブナ原生林の面積減少の影響を受けていることは容易に想像される。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、路肩の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【引用文献】

杉村明道, 1995. 愛知県面ノ木峠にてヒゲブトハナカミキリを採集. 月刊むし, (293): 34.

AICHI: NT (JAPAN: -)

ヒゲジロホソコバネカミキリ Necydalis odai Hayashi

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では設楽町の原生林のみから知られている。

【形態】

体長 $14\sim25$ mm。ホソコバネカミキリの仲間は県内に 5 種が生息するが、いずれも上翅が非常に短く、頭部と前胸背を合わせた長さとほぼ同じ程しかない。類似種とは、触角の $8\sim10$ 節が白色であることから区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

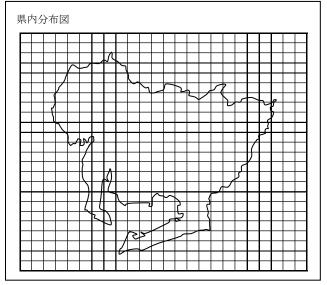
県内では設楽町(水谷, 1981)の原生林の みから知られる。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。



【生息地の環境/生態的特性】

ブナ林に生息するが、一般的に自然度の高い森林に依存する。成虫は7~8月に出現し、ミズナラの立ち枯れ、腐朽部に集まる。幼虫もミズナラの立ち枯れ、朽木を食べる。

【現在の生息状況/減少の要因】

1980 年頃に設楽町の原生林内で本種の発生木が発見され、多数の個体が確認された。近年でも未公表ながら採集されている。他府県にくらべてブナ林の面積が狭いことを考慮すると生息地盤が脆弱であることは間違いない。周辺の環境は、1980 年当時と大幅な改変はない。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、路肩の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。また、原生林内または周辺の枯死木は、本種および朽ち木生の昆虫類の重要な発生木となる可能性が高いので、むやみに切り倒したり、除去したりしないよう林業関係者には留意されたい。

【引用文献】

水谷高弘, 1981. 愛知県にてヒゲジロホソコバネカミキリを採集. 月刊むし, (124): 33.

【関連文献】

AICHI: NT (JAPAN: -)

オオホソコバネカミキリ Necydalis solida Bates

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では豊田市(旧稲武町)のみから知られる。 他府県にくらべ生息基盤が脆弱である。

【形態】

体長 11.5~30mm。頭部と胸部は黒色、上翅は黄褐色だが、オスでは基半部を除き黒色となることも少なくない。脚は黄褐色で、後腿節基半部は黒色となる。

【分布の概要】

【県内の分布】

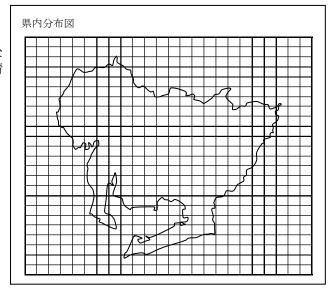
県内では豊田市(旧稲武町)(竹内,1983) から確認されているだけであるが、未公表な がら設楽町の同じような原生林からも生息情 報が得られている。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。



【生息地の環境/生態的特性】

ブナ林に生息する。成虫は **7~8** 月に出現し、ブナの立ち枯れに集まる。幼虫もブナの立ち枯れ材を食べる。

【現在の生息状況/減少の要因】

本種はホソコバネカミキリ類の中では比較的優先な種の部類に入るが、西日本での分布は稀薄となり、県内では確認が極めて困難な種である。本種が初めて発見されて以来、追加の生息情報はわずかで、個体数はかなり少ないものと考えられる。過去にさかのぼれば、ブナ原生林の面積減少の影響を受けていることは容易に想像される。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、路肩の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。また原生林内または、周辺の枯死木は、本種を初め色々な昆虫類の発生源となるので、特に危険がないかぎり切り倒したり、除去したりしない配慮が必要。

【引用文献】

竹内克豊, 1983. 愛知県奥三河産カミキリムシ数種. 月刊むし, (154): 8.

【関連文献】

ヨコヤマヒゲナガカミキリ Dolichoprosopus yokoyamai (Gressitt)

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、全国どこでも個体数が少ない。県内では奥三河に僅かに残されたブナ林に依存して生息しているが、他府県にくらべ存続基盤が脆弱であると判断される。

【形態】

体長 $25\sim30$ mm の大型のフトカミキリ。黒色で、表面は灰白色の毛に霜降り状に覆われる。触角はオスでは体長の約 1.8 倍、メスでは体長の約 1.1 倍。

【分布の概要】

【県内の分布】

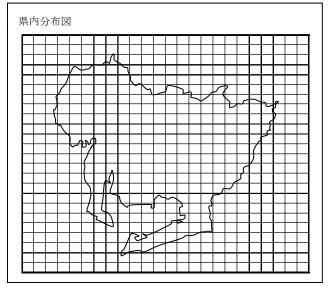
豊田市(旧稲武町)、設楽町、豊根村(旧富山村)の3カ所から知られる。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布。

【世界の分布】

日本の特産種である。



【生息地の環境/生態的特性】

ブナ林に生息する。成虫は 8 月に出現し、ブナの生木に見られる。夜行性で、昼はブナの大木の梢ひこばえ付近に潜み、夜になると幹を徘徊するといわれるが、詳しい生態は不明。灯火に飛来する個体が採集される例が多い。幼虫もブナの生木を食べる。

【現在の生息状況/減少の要因】

個体数はかなり少ないものと考えられる。生息地の内、豊田市(旧稲武町)と設楽町について、 生息環境は見た目では大きな改変はないが、採集が難しい種であるだけに正確な生息状況の把握は 困難である。しかし、自然度の高いブナ林にしか生息できない種であるので、過去にさかのぼれば、 ブナ原生林の面積減少の影響を受けていることは容易に想像される。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、路肩の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【関連文献】

(国:リスト外) (**JAPAN**:-)

オオミズクサハムシ Plateumaris constricticollis (Jacoby)

【選定理由】

東北日本と日本海側に偏った分布をする本種にあって、本県の生息地は飛び地的な存在である。東京以西の太平洋側では唯一の産地であるが、生息基盤が極めて貧弱である。形態的には、岐阜北部から富山県にかけて分布する亜種トヤマオオミズクサハムシと、中国山地に分布する亜種チュウゴクミズクサハムシの中間的な特徴をもち、両者をつなぐ存在として学術的に貴重である。

【形 熊】

ネクイハムシ類では最大の種で、北日本に 分布するものでは 12mm を越えるが、県内の 個体群は小形で $8\sim10mm$ 。金銅色で、触角 は黒色。腹部第 1 節はそれ以降の節の和より 短く、前胸背には皺がない。



愛知県: 準絶滅危惧

AICHI: NT

設楽町,2006年6月,長谷川道明 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

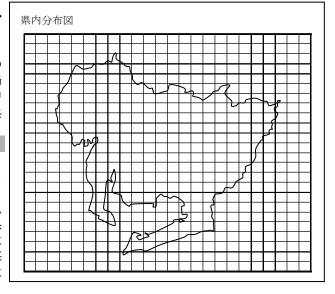
面ノ木峠(豊田市〜設楽町)周辺(長谷川・吉富, 1998)。

【国内の分布】

北海道、本州に分布する。分布は日本側の山地に偏る傾向があり、特に中部以西では局所的。糸魚川一静岡構造線より西側の本州中央部(富山県・岐阜県・愛知県)、中国山地(兵庫県・岡山県)。

【生息地の環境/生態的特性】

ヤマドリゼンマイ、オオバギボウシ、サワアザミ、ハンノキなどが自生する山地の湿地。成虫は 6 月頃出現し、スゲ類、ハンゴンソウ、オオバギボウシなどの葉上に見られる。幼虫は地中でスゲ類の根を食べる。成虫は富山県や中国山地の個体群ではスゲ類の花あるいは葉を食べているのが観察されているが、北海道や長野県北部などの個体群では成虫期には摂食しないのではないかと考えられている。県内では後食植物は確認されていない。



【現在の生息状況 / 減少の要因】

面ノ木峠周辺の湿地 2 ヶ所から確認されている。そのうち初めに確認された生息地の環境は発見当時(1997年)と表面上大きな変化はない。長期的には温暖化(あるいは乾燥化)と山地の湿原の減少が本種の減少の要因になると考えられる。

【保全上の留意点】

生息地の湿原は、現在設楽町の天然記念物として湿地植物の保護施策がとられている。現在の状態の維持と、周辺部の森林を含めた保全策が執られ続けるられることにより絶滅の心配は当面のところ遠のく。

【特記事項】

林(2004)は、本種をエゾオオミズクサハムシ、シナノミズクサハムシ・トヤマミズクサハムシの3 亜種に分類し、本個体群をトヤマミズクサハムシ *P. c. toyamaensis* としている。

【引用文献】

長谷川道明・吉富博之, 1998. 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48. 林 成多, 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.

【関連文献】

野尻湖昆虫グループ, 1985. 日本のネクイハムシ. 野尻湖昆虫グループ.

キヌツヤミズクサハムシ (スゲハムシ)

Plateumaris sericea (Linnaeus)

【選定理由】

湿原・湿地に生息する代表的な昆虫で、限 られた場所に温存されているにすぎない。開 発や自然環境の変化に伴い減少傾向にある。

【形 態】

体長: ♂6.5~7.4mm、♀7.0~8.8mm。背 面の色彩は銅色の個体が多い賀変異が大きく 黒、紫、青、緑、黄、赤などの個体があり色 彩変異が大きい。前胸背板には横シワが発達 し、中央縦溝は深く連続する。背面は金属光 沢があり、すべての足は金属色である。



新城市, 2008年5月12日, 山崎隆弘 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡設楽町裏谷(長谷川・吉富, 1998)、 豊田市田之士里湿地(高橋, 1988)、豊田市羽 布町根池、新城市作手高里巴湖。

【国内の分布】

北海道、本州、九州、佐渡。

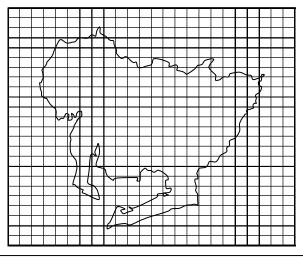
【世界の分布】

南千島、サハリン、カムチャッカ、アムー ル、ハバロフスク、プリモルスキー、朝鮮半 島、中国、モンゴル、中央アジア、ヨーロッ パ。

【生息地の環境/生態的特性】

成虫は $5\sim6$ 月頃に出現し、スゲ類、イグ サ属、ガマ属、アヤメ属、ミクリ属、ミズバ ショウなど多様な植物に訪花する。

県内分布図



【現在の生息状況/減少の要因】

湿原・湿地特有の種である。寒冷地に多い種で、長野県や岐阜県では産地も個体数も多いが、こ うした環境の少ない県下での元々の生息域も山間部に限られていたものと思われる。今後長期的な 温暖化による影響で、乾燥化が進めば生息環境の悪化により、衰退が心配される。

【保全上の留意点】

生息地の湿原・湿地の保全は、周辺部を含めた水源地の確保が重要である。広範囲にわたる森林 の保護などの保全策を講じることが重要である。

【特記事項】

本種の正確な生息状況はまだ不十分な点が残されており、さらなる詳しい継続調査を必要とする。

【引用文献】

長谷川道明・吉富博之, 1998. 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48. 高橋和宏, 1988. ネクイハムシ類 1987 年の採集記録. DONACIIST, (2): 22.

【関連文献】

木元新作・滝沢春雄,1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会. 野尻湖昆虫グループ, 1985. 日本のネクイハムシ. 野尻湖昆虫グループ. 林 成多, 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.

(JAPAN : -)

ヒシチビゾウムシ Nanophyes japonicus Roelofs

AICHI: NT

【選定理由】

本種はヒシに強く依存しており、ため池のヒシがなくなると生存できなくなる。本来特に珍しい種ではないが、微小種であるため、生息情報が乏しく、県内での生息状況の変化について正確なことは不明である。しかしながら、主要生息地であるため池の環境が著しく悪化している現状から判断すると、絶滅の可能性が増大していると考えられる。

【形 態】

本州産のチビゾウムシ類では比較的大型で体長 2.1~2.2mm、体色は黒色または褐色。腿節に歯がない。

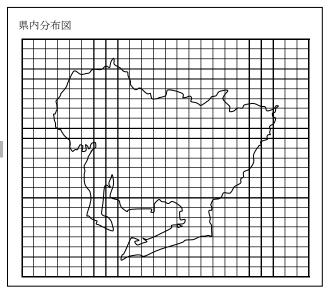
【分布の概要】

【県内の分布】 豊明市、東浦町。

【国内の分布】 本州、九州に分布する。

【生息地の環境/生態的特性】

池に生えるヒシの葉のフロート部分に産卵する。成虫はヒシの葉を後食し小さな丸い穴をたくさんあける。成虫を見つけられなくても食痕を調べることで生息の確認が可能である。



【現在の生息状況/減少の要因】

豊明市の長間地池では非常に多くの個体を確認することができた。東浦町鰻池では小さなため池に僅かばかり生息している。しかし、他地域ではヒシの自生する池をいくつか調べたものの全く確認できなかった。

長間地池の環境が現状どおり維持されれば、同地での個体群が急激に減少することはないと思われるが、付近に別の生息地がないため、長間地池の環境が損なわれると、県内での絶滅に直結する恐れがある。かつてはヒシの生えるため池は随所にあり、本種の生息地も広かったのではないかと考えられる。しかし都市化による埋め立て、農業整備の一環としてため池の改修、侵略的移入種の増殖などにより生息地の消失・分断化が進み、本種が発見された時にはすでに僅かな生息地を残すだけになっていたという可能性が強い。

【保全上の留意点】

ため池の維持管理については、そこに生息する生物種の保全についても併せて考慮して行う必要がある。また、ため池周辺の環境保全もため池に生息する希少種の保全には必要なことである。

【関連文献】

豊明市史編集委員会, 2003. 豊明市史資料編補 7 自然目録, 354pp.

アカズクビナガキバチ Euxiphydria potanini (Jakovlev)

【選定理由】

生息地である森林の伐採によって生活の場を失いつつある。

【形 熊】

体長 20mm 内外。体全体は黒色で、頭部の後方は赤色。肢は黒色。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山周辺からだけ記録されている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国。

【世界の分布】

樺太、千島、東シベリア、中国、朝鮮半島。

【生息地の環境/生態的特性】

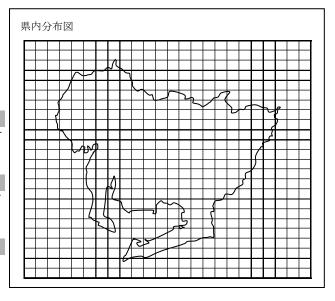
幼虫は山林の樹木の中で材を食べて生活すると思われるが、樹種は不明。

【現在の生息状況/減少の要因】

山林の減少によって生活環境が狭められている。

【保全上の留意点】

良好な山林の育成。



愛知県: 準絶滅危惧

AICHI: NT

(国:リスト外)

(JAPAN : -)

昆虫類 <ハチ目 セイボウ科>

INSECTA < HYMENOPTERA CHRYSIDIDAE>

フタツバトゲセイボウ Elampus bidens tristis Tsuneki

【選定理由】

人工林の増加に伴い生活環境が改変されたことと、元来少ない個体数であったことが重なり著し く減少した。

【形 態】

体長 7~9mm。黒味の強い地味な色彩をしたセイボウで、周縁は緑青色。頭・胸部、中節上面は 粗大点刻を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設地方の山林に生息しているが、記録は少ない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【生息地の環境/生態的特性】

山地で低木の葉上に静止していることが多い。ハチに寄生すると思われる。

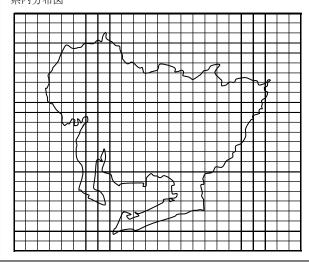
【現在の生息状況/減少の要因】

諸開発による山林の減少と植林による森林 の単純化。

【保全上の留意点】

良好な山林の育成が望まれる。

県内分布図



愛知県: 準絶滅危惧 AICHI: NT

(国:準絶滅危惧) (JAPAN:NT)

(国:リスト外)

(JAPAN : -)

ニッポンハナダカバチ Bembix niphonica F.Smith

【選定理由】

河川敷や海岸の砂浜が少なくなり、生息環境が狭められた。その上、四輪駆動車が砂浜を走行す るために生活できない状況となっている。

【形態】

体長 20~23mm。体は黒色で全体に黄白色の横紋がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

木曽川など大きな河川の河川敷や海浜。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、屋久島。

【生息地の環境/生態的特性】

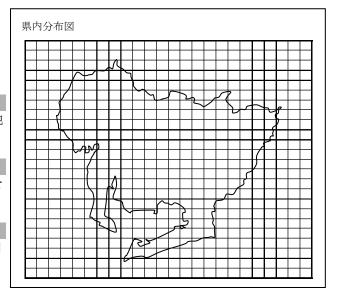
河川敷や海岸の砂浜に生息しており、砂地 に孔を掘って営巣する。

【現在の生息状況/減少の要因】

河川敷内の砂地が少なくなり、生活の場を 追われている。

【保全上の留意点】

河川敷や海岸への四輪駆動車の乗り入れ自 粛、その上で砂浜の再生を考慮する。



愛知県:準絶滅危惧

AICHI: NT

昆虫類 <ハチ目 ハキリバチ科>

INSECTA < HYMENOPTERA MEGACHILIDAE >

キヌゲハキリバチ Megachile kobensis Cockerell

【選定理由】

河川敷の改修によって生息場所を失いつつあり、発生個体数が非常に少なくなった。

【形

体長 11mm 内外。体は黒色で全体に白色毛を密生するので、白っぽい色調となる。腹部に白色毛 で形成された数本の帯状紋を持つ。

【分布の概要】

【県内の分布】

木曽川、庄内川などの河川敷。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬、屋久島。

【生息地の環境/生態的特性】

砂丘の見られる海浜や、河川敷で砂浜がよ く発達した地域に生息している。成虫は花に 飛来し、砂地の地中に営巣する。

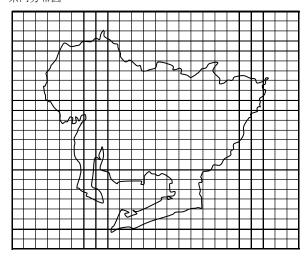
【現在の生息状況/減少の要因】

河川敷の自然が失われつつあり、それに伴 って個体数が少なくなった。

【保全上の留意点】

河川敷の保全が必要。四輪駆動車の河川敷 内への乗り入れを慎むべきである。

県内分布図



愛知県:準絶滅危惧 AICHI:NT (国:リスト外) (JAPAN:-)

ササキリギングチ Ectemnius furuichii (Iwata)

【選定理由】

山林開発によって林床のササが少なくなり、狩りの対象となっているササキリの減少によって生活の場が減少した。

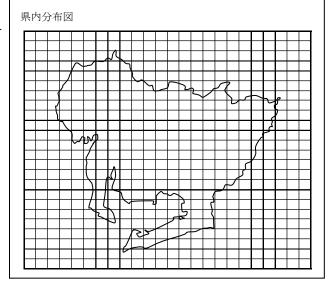
【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山周辺に記録されているが、調査不十 分なことも考えられる。

【国内の分布】 本州、対馬。

【世界の分布】 朝鮮半島。



【生息地の環境/生態的特性】

山林の林床にササが茂った環境で、バッタ目のササキリを狩り幼虫の餌とする特異な生活をしている。

【現在の生息状況/減少の要因】

森林の開発や植林による単純化が主要であるが、元来個体数も少なかった。

【保全上の留意点】

良好な林床を有する森林の保全と育成。